

(島津家久)  
又八郎殿  
(島津義弘)  
兵庫頭殿

933 「古御文書三番箱中」

改年之御吉兆、千喜萬祥、猶更不可有休期、多幸々々、  
抑爲此等之祝儀、任舊例五明貳本令進之候、倍永春中諸  
賀可申加候、慶事、恐々謹言、

正月六日

(島津家久)  
修理大夫入道龍伯

謹上 兵庫頭殿

934 「古御文書三番箱中」

追而申候、おくうり知行まいらせられ候、さやうの御禮  
義として、河上七郎次郎さしこされへきにて、被仰付候  
へ共、何かとさし合、漸今度被遣候、於様子者、かの者  
可申候、兼又本源右衛門尉、治少老より神文血判ヲさせ  
られ、何そ被仰出たる由、つたへ承及候、我々へハとか  
く不申候、無心元ふしん深重候、御心得のためニ令申候、

他言有間敷候、恐々  かしく、

六月二日卯刻

龍伯(花押)  
御判アリ

又八郎殿

龍伯

935 「古御文書中在三番箱卷二」

御出船之儀何分候哉、其後御左右無之間、爲可承用飛札  
候、然者東山へ御用之儀候而、書狀進上候、御持せ有へ  
く候、同者鎌田左京亮、別にも御用候而、可致祇候之由  
申付候條、彼者へ持せられ候而可然候する、次先日(龜)公  
方(川家康)様御上着之由風聞候間、其通申越候キ、然處頃罷下候  
者之申者、三月十五日上方罷出候、其まて者無御上着候、  
定頃者御光着候らんと申、先申越者虚説ニ候、此段爲可  
申分如斯候、恐々謹言、

卯月五日

龍伯(花押)  
御判

少將殿

參

「御文庫三番箱中」

一 百姓をあへれひ憲法たるへき事、民の飢寒をおもひ、苦惱貧富をしるへし、

一 屋作をけつこうする事、いにしへの賢王ふかく是をきんす、一 治罰をうすからしめて、勸賞をあつくすへき事、

一 民のかうさくのいとまをまもつて、めしつかふへき事、

一 君の利を本として、わたくしの利をたしなむへからざること、

一 民の利をさきとして、をのれの利を次にすへき事、

一 ほしいままに、たみの物を取へからず、民まつしき時へ、君財なし、たとへは枯たる木の本のことし、民ハ君の財也、忽緒すへからざる也、一人の心をやしなうをもつて情とす、眷屬をかへりみるへき事、一 威勢もつて人を竟時、其身をしたかゆれとも心ハしたかハす、正直をもつて民を隨ゆる時ハ、身命をかるんして

心をそむく事有へからざる也、

一 下らうのとかをいふへからず、下腐の無禮をいふへからず、一 さんけん（謙）と讒訴とを用へからず、虚言中言を信用すへからざる事、一 我あひする者なりといふとも、科あらは罰すへし、我にくむ者なりといふとも、

君に忠あらは賞を行へき也、一家をおさむるほどの者ハ、國を治めへし、たゞ民を憐む者をもつて、君の器となすへき也、一人ハ罵詈誹謗するとも、うけとりてこれをとかむへからず、

一 隠密してはつかしき事、是をなすへからず、人の眼天にかゝる事、

一 獨言なりといふとも、比興のことはハつかうへからず、人の耳壁につく事、

一 利口を云へからざる事、一 ふるきほうくよむへからず、人の文を「並」（並）を取て、これを見へからず、

一 あしき若たう是をつかうへからざる事、一 あしき友にましへるへからざる事、い上廿ヶ條、此旨を守て、殊

に人を成敗人也、

〔右義久公御文書中ニあり、御名年月等なし〕

〔本文書ハ「舊記雜錄後編二」八五七號文書ト同文ナリ〕

937

〔御文書四拾八番箱中〕「義久公卷中」

覺

一大佛御造立ニ付而、からかね、地かね被仰付候事、付

木食上人へ談合申候事、

一右のからかね、定而國役ニ可被仰付と存候、何も御由

斷有間敷事、

一伏見御城番ニ付て、人數可被召上由申下候キ、然者貴

所御供衆ハ可被相殘事、

一大刑少殿内閑齋と申仁弟、貴所へ奉公させ度由、しき

りニ被申候事、付朽網平六事、

一出水瀬崎父馬之事、付母駄給候由、六右申上候御禮之

事、

以上

五月十日

〔本文書ハ「舊記雜錄後編二」七五九號文書ト同文ナリ〕

938

〔御文庫四拾八番箱中〕「義久公卷中」

覺

一境目ノ小城ミミくりいれらるゝ由、尤候事、

一無人笑止ニ候事、

一豹皮御禮之事、

一馬之事、

一被仰付御道具之事、

一家康一段御ねんころの事、

一すぐニ御歸朝にて候ハ、御つほ二ツ下候する哉之

事、

一こゝもと何事モ此間ニ相替候事、

一忠長・抱節・作さへもん各々へ相心得へきノ事、

一又八郎殿へ御音信御禮義之事、

一さいしやうとのさかしく候事、

一人と物さたの事、

一御藏米いまた無上着事、付何事モ國元暖遅といたし、

笑止ニ候事、又唐船之事、

一今程無事ニ候事、

一天子御惱之事、

以上

(本文書ハ「舊記雜錄後編二二四九八號文書ト同文ナリ」)

939 「御文庫四拾八番箱中」

爲當年之御祝儀、以使者申入候、陸奥守罷上之條 御前

之儀御入魂所仰候、仍御太刀一腰・馬一疋・緞子五端、

致進入候、表御慶詞計候、恐惶謹言、

三月十八日

龍伯◎(花押)  
〔御判〕

本田上野守殿

人々御中

本田上野守殿

人々御中

嶋津修理入道

龍伯

940 「御文庫四拾八番箱中」

就御能、山田彌九郎、本田與左衛門尉被召寄候、與左衛

門尉事者、藏入糺明ニ罷居候ハて、不叶儀候間、召留候、

此旨彌六を以申越候キ、彌九郎事者、昨日此元弓場始之

振舞御座候、客之大將ニ而候故、留置候 于今者可爲遅

候へとも、先被差遣候、將◎(赤)〔又〕頃京都へ早打可被差登

之由、先日承候ツ、就其、書狀等調置候へとも、とかく

音なしに候、急度罷上候哉、又被差延儀候哉承度候、恐

と謹言、

七月廿日

龍伯◎(花押)  
〔御判〕

又八郎殿

941 「御文庫四拾八番箱中」

存松・抱節へ被仰付儀、具ニ申聞候、然者難成之由、深重

ニ御佗申候へ共、頻ニ申付候條、領掌仕候、さてハ出水

之事、御置目ニ慥ニ被仰付、乍勿論武庫於被成御座候者、

應御下知、御奉公可仕由、抱節申事に候、自然御座所な

と程遠様ニ候ハ、一圓ニ罷成ましき由、申候、爲御心得候、恐々謹言、

三月廿五日

龍伯◎(花押)  
御判

又八郎殿

942 「御文庫四拾八番箱中」

改年之御慶重疊雖申事舊候、猶更不可有休期、多喜不易、抑爲此等之儀、使書并太刀一腰・馬一疋遣之候、寔表祝言計候、猶永日中、諸吉可申承候、佳事、恐々謹言、

正月廿三日

修理大夫入道龍伯◎(花押)  
御判

謹上 又八郎殿

943 「全上」

年頭之御慶不易珍重々、抑此等之祝儀彼是爲可申談、喜入大炊助差渡候、仍五明三本・道服二襪黃筋茶之綾令進之候、猶巨細者此者可申達候、佳事、恐々謹言、

正月十一日

龍伯◎(花押)  
御判

又八郎殿

944 「御文庫四拾八番箱中」

其方ヨリ出候目錄之事、檀紙ニ被書候、いかゞの由度ニ申候つれ共、さして申事ハ無之候キ、然處ニ當年八朔ノ目錄モ多々檀紙見之申候、伊勢向庵へたつね申、聞書如此仕置候、御目ニかけヘキタメニ、書うつし進之候、今度平田弓兵衛尉ニ承候モ同前ニ候、其元ヘモ向庵下知にてか候らん、我々承ちかへ候歟、不審ニ存候、たゞし別人の傳にて候哉そと承度候、ケ様ナルふしんの儀ハ、無腹藏はれ合候て、猶モ不審候ハ、後便ニたつね申度存候、兵部などニ御たつね候てきこしめし候へかすと存候、

又的ゆかけの事、うけ給候キ、的ゆかけのこしらへとて、別ニならひ有事ハ、うけ給及ハす候、もろゆかけノ右ノ方へをと矢さす穴ヲあけられ候て、御事かけ候ハ、先よく候する、あけやうニなとならひ候、追而可申候、二

ケ條候、此者申え候ましく候條、老筆をわなゝかし候、  
かしく、

八月七日

龍伯〔御判ナシ〕

少將殿

〔家久公御譜中、年間不知ニ在リ〕

945 〔御文庫四拾八番箱中〕

御書中委遂披見候、於様子野村才右衛門尉へ申含差越候  
條、不能詳候、恐々謹言、

〔慶長中〕菊御譜ニアリ

□月十六日

龍伯〔判〕<sup>◎</sup>〔花押〕

少將殿

まいる

〔家久公御譜中、年間不知ニ在之〕

946 〔全上〕

猶々可致判候へ共、別儀有ましく候條、如此候、  
其許御能之儀、此十九日必定候之哉、左候ハ、拾七八  
日之間、罷越候て、可致見物候、定日可承候、御報待入

候、恐々謹言、

六月十一日

龍伯〔御判ナシ〕

少將殿

〔家久公御譜中、年間不知ニ在之〕

947 〔全上〕

今日の鷹かりハ不能成候、鷹衆モはや返し申候、新もく  
入ハ明日御たて候哉、是よりも用談候、<sup>〔本マ、〕</sup>こなたへ御遣し  
候へく候、拙子ハさむく候へは、うつミ火のもとを、は  
なれやらてこそ居候へ、かしく、

貳月廿二日

龍伯

又八郎殿

948 〔御文庫四拾八番箱中〕

昨日之書狀も〔多〕<sup>◎</sup>部令披見候、從是以書札申候様ニ、菟  
角御越候て可然候之條、萬爲御存知候、恐惶謹言、  
五月廿四日

龍伯〔御判〕<sup>◎</sup>〔花押〕

又八郎殿

參御報

949 「全上」

誠年首之御慶珍重と、然者、先日以高崎彌六申談候儀ニ付、預御狀候、何れ今日者、可有御越之間、以面可致御談合候條、不祥候、恐と謹言、

正月九日

少將殿

龍伯◎(花押)  
御判

「家久公御譜中年間不知ニ在リ」

950

「御文庫四拾八番箱中」

猶と、明日者被差延之由、承候而、致由斷候、俄之故、一段不出來候間、慰畋・玄與なとへ、被成御尋、可被取直候、  
年首之御慶不易珍重と、仍明日之千句發句之事承候、種と案候へ共、はや老衰仕不能成候、乍去、抱節・大炊助へ致了簡、發句書付進入候、明日者、先百歌可有之と存

候處、發句之事、急ニ承候、何事もケ様ニ俄ニ被仰付候、

發句なとへ、兼日心靜ニ案し候へてへ、不成事候、殊ニ

一順再返未無之儀候間、明日之事ニ者、可難成候へ共、

先ニ發句令進之候、恐と謹言、

「慶長中」  
正月十五日

龍伯◎(花押)  
御判

又八郎殿

951

「御文庫四拾八番箱中」

幸使之條、用一書候、

一京都任 御下知、分國中所替ニ相定候、就其知行等茂相かへり候之故、諸人之知行も皆と支配仕直候間、一向不道行候、殊幸侃腫物、彌此比令再廢候之條、唉止候、併談合最中候之間、可相濟かと存候事、  
一各と返地等、今度之御檢地之上を以、令配分候之まゝ、不可有存分候へとも、不及料簡候事、  
一我と上洛之事、可爲年内之由、於京都出合候へ共、國中之置目ニ諸篇隙入候之間、爲使者平田新左衛門尉指

上せ候儘、其御返事次第ニ可致其分別事、

一高麗和平之嘜、此表へハまち／＼に相聞得候、一圓ニ

頃者、菟角之説も無之候、何分ニ相濟候哉、無心元令

存候事、

一京都屋敷之儀、凡家作等、門なども如形可致造畢之様

ニ候ツ、然處ニ 大閣様御假屋許ニ可罷成在所を、於

洛中可被見合之由、玄以法印・増田殿・石田殿・長束

殿、此御人衆へ被仰付候へハ、此方之屋敷并家居等モ、

御假屋ニ可然之由、被仰定候、因茲、御談合共候哉、

聚樂之内ニ御殿を餘多被下候、誠外聞と申、世上之覺

茂祝着不可過之候、仍其方うもしの事も、伏見へ一ツ

柳と申仁之在所、明合候を、被下候、依其、先月十七

日被成移之由、相聞得候、爲御心得候事、

一拙者大口へ可罷移之通、於京都申入候へ共、餘々住居

難成在所候之間、大隅之濱之市近所ニ、屋敷を構候て、

年内必可罷移之企にて候事、

一武庫者蒲生を可爲居城と申上候、雖然、鹿兒嶋へ移候

へと承候、乍去、先以中宿として、帖佐へ被成移候事、

將◎赤〔又〕武庫者年内上洛ニ相定候へ共、とし明候するか

と、相存候事、猶追而可申通候之間、不能細筆候、恐

と謹言、

霜月十二日

龍伯◎〔花押〕〔御判〕

又八郎殿

〔本文番ハ「舊記雜錄後編二」一六二九號文書ト同文ナリ〕

952 「御文庫二番箱義久公二軸中」

御書畏而頂戴仕候早、抑去夏已來言上之旨候、然者、以

泰平寺法印被 仰出之趣、忝候、殊御太刀一腰・馬一疋、

致拜領候、眞面目之至候、仍至伯耆家和融之段、被成御

下知候、存其旨候、細碎右法印可爲上聞候、此謂宜預御

取合候、恐惶謹言、

七月十日

親賢◎〔花押〕〔判〕

伊集院右衛門大夫殿

953 去年以來者無音罷過候、仍貴國江龍造守方今程不通之由

候、然者御内意之段承、御和睦之儀、致媒介度之旨、從

秋月方、以使僧被申達之趣、被成御分別、彼者共江於被

仰聞者、可爲恐悅候、猶用口狀候、此之由可得御意候、

恐惶謹言、

卯月六日

嶋津殿

參人々御中

舜有◎(花押)  
〔判〕

▽◎

嶋津殿

參人々御中

彦山座主

舜有

△

954 「御文庫箱中」

態捧啓書候、仍去秋時分、被對相良義陽、御神文到來候、

其御返事、翻寶印之裏、覺悟之旨被申顯候條、城親賢以

同前令進覽候、於此上者、可然之様御分別最可目出候、

其段委曲彼使僧ニ申聞候之間、不能審候、可得御意候、

恐々謹言、

十二月十三日

嶋津殿御宿所

顯孝◎(花押)  
〔判〕

嶋津殿

參御宿所

伯耆

顯孝

〔本文書ハ「舊記雜錄後編」二二一八七號文書ト同文ナリ〕

955 「御文庫御寶鑑中」

此紙面、龍伯へも、又八郎へも可被入見參候、

今度之仕合、武庫無人故、對内府不被任心中、逆心と諸

人令推察事候、然◎者、龍伯・又八郎へ、前後啖止かり

の沙汰、無其隱候間、弥以其旨、急度被差上使者、可被

申理事肝要候、次敗軍之時之衆數人、我々所にて置候、

内府御内證無異儀候間、是又可心安候、かしく、

十月七日

嶋津圖書頭殿

〔信尹公也〕  
〔花押也〕

元巢

伊勢兵部少輔殿

利庵

本田六右衛門尉殿

956 「御文庫二番箱一軸中」

其堺之儀、弥無事之由承候、尤肝要候、然者、飫肥表未  
落着候哉、任御入魂、重々至日州可申遣候、仍太刀一腰・  
織筋五端送給候、祝着候、猶妙圓寺可有演說候、恐々謹  
言、

十二月十三日

嶋津殿

宗麟(花押69)

嶋津殿

宗麟

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二二七〇〇號文書ト同文ナリ)

957 「御文庫二番箱一軸中」

今年之御慶不易萬幸々々、抑舊冬以菱刈御知行御在軍之  
由、承及候、千勝萬勢目出訖、此等之義言上候、義俊代  
々申談候、旁以同心忠貞不可有餘義候、仍弓五張進上候、  
併奉表御吉例計候、宜預御披露候、恐惶謹言、

貳月廿二日

(志岐諸藩)  
麟泉(花押山)

嶋津入道殿

(貴久)  
御奉行中

嶋津入道殿

御奉行中

志岐兵部少將入道

麟泉

(本文書ハ「舊記雜錄後編」二四二七號文書ト同文ナリ)

958 「御文庫二番箱一軸中」

今春之御賀祥千喜萬悅、猶以不可有際限候、多幸々々、  
抑此等之爲御祝儀、太刀一腰・織筋二端令進獻候、誠補  
佳例計候、諸吉永日中可得御意候、恐々謹言、

二月八日

(相良義陽)  
修理大夫頼房(花押)

謹上嶋津殿御宿所

謹上 嶋津殿御宿所 相良 修理大夫頼房

(本文書ハ「舊記雜錄後編一」三六五號文書ト同文ナリ)

959 「御文庫二番箱一軸中」

態以一翰令申候、仍去夏伊東方真幸江被取懸候處ニ、以御加勢之儀、伊東宗徒之衆數百人戰死仕候之由、承及候、御案中候、被得御大利候、御悅則雖申上度候、遠國之故、殊更當時者通路難成候條、延引之樣候、弥御堅慮之御行不及申候、隨此口之儀、豐州可任御下知之覺悟候間、聊無油斷候、御察之前候、將又於與州表、近日兵船被差渡候、是又御退治程有間敷候、爲御存知之候、猶追而可致言上候趣、可然様御披露所仰候、恐惶謹言、

八月十二日 麟松◎(花押)判

伊集院衛門大夫殿

脇刀一腰令進覽候、表御祝儀計候

土持右馬頭入道

伊集院衛門大夫殿 麟松

(本文書ハ「舊記雜錄後編一」六八四號文書ト同文ナリ)

960 「御文庫二番箱一軸中」

至肝付表、長々御着陳御軍勢之儀、察存候、遠方故每事無音非疎意候、當時御行等細々承度候、委悉猶定泉坊可相達候、重疊可得御意候、恐々謹言、

九月十一日 相良義陽◎(花押)頼房判

嶋津殿參 御宿所

相良

嶋津殿參 御宿所 頼房

(本文書ハ「舊記雜錄後編一」六八六號文書ト同文ナリ)

961 「御文庫二番箱義久公一軸中」

將◎亦又日◎亦日向巢鷹口武庫有、御相談一ツニよらず、御差上尤候、於此方切々被仰出儀ニ候之間、不可有御由斷候、

「御文庫二番箱義久公一軸中」

態可令啓達所存ニ候之處ニ、從山伏殿使者被相下之由候  
條、令申候、仍肥後國有勘所へ貴所御折紙被遣候、安國  
□到來候、貴邊御下候砌者、殿下様御腹立候て、佐々陸  
奥守も可被加御成敗候、國侍之儀者、可被成御赦免様ニ  
雖御内意候、佐陸手前之儀も、御氣色相直候、肥州諸侍  
共、一旦不致言上も企逆心候段、曲事 思召、左様之掟  
并檢地爲被仰付、淺野彈正少弼・加藤主計頭ニ、四國衆  
被成御添、被差遣候、其上肥後之儀、悉屬御本意候條、  
一切不可有御構候、諸篇於御指出者、結句押領も有之候  
様ニ思召候へ者、如何候而、能々御得心專一候、其元被  
明隙有り、上國義久御出之儀等、御相談尤候、爲其□一  
筆候、恐々謹□、

正月十六日

石田治部少輔 ◎(花押)  
三成(判)

長岡兵部

判

「御文庫二番箱義久公一軸中」

如貴札、去夏就御上洛、此表被成御通候、其砌、依御急  
致無調法候之處、遠方之在所爲御禮、御使僧殊銃并南蠻  
藥角一、被懸御意候、御懇志忝之躰、菟角不及申候、乍  
勿論、自今以後、連々◎可傳爲意事、所仰候、心緒猶用口上  
候之條、定而可被相達候、恐惶謹言、

卯月三日

鎮胤(花押)

嶋津殿

參貴報

星野中務太輔

嶋津殿

參貴報

鎮胤

猶々、上様御渡海、四五月之比たるへく候、先一  
番、羽飛・淺左京・羽大しう・羽下州、被相越候、  
舟無御座候間、如此之衆、渡海候て以後之儀候間、  
御渡海御延可申候、貴老様之御事へ、少もはやく御  
渡海有度儀候へ共、御舟まいり次第候、いかに候て  
も不被任御心中義候、此段者 公儀御存候、以上、

「御文庫二番箱義久公二軸中」

以上

豊後國爲御改罷越候、然處、百姓等悉明走付て、如此被成御朱印候、急度有御請、百姓等被送返候ハ、可爲本

二三日者不得御意候、

一御目見之事、未御透無御座付て、何共不被仰候、幽齋

と申談、やかて被成御出候様可仕候、少遅候儀、御き

遣なざるましく候、

一高麗表之儀、小西攝津守、平安道と申所ニ居陣候處、

朝鮮大明者相集、去月五日及一戰、小西方を初て、其

外之人數打果申由、注進候、然候間、都より二日路程

在之、江陰と申所まで、取退候事、

一兵庫頭殿御座候所、何事無御座候、可御心安候、何事

も懸御目可承候、恐惶謹言、

二月十五日

(石田) 正澄判

義久様

人々御中

望候、今雜石物成共、作毛時分候間、不可有御由斷儀候、

恐々謹言、

六月廿八日

山口玄番頭◎(花押) 宗永判

さつま 大すみ 日向 嶋津義久

御留守居御中

義久公 年間不詳

附 錄 舊 記 雜 錄 卷 十 二

965

〔川上經久譜中〕

〔正文當家有之〕

當家弓馬之儀、到父貴久傳受之外、細密之條と連と相尋候、就夫極意不殘之趣、今度以の神載の被達之事、誠感懷之⑤〔到〕候、此道不淺儀候間、於無執心方者、聊不可致他言候、事と、恐と謹言、

二月十八日

〔島津義久〕  
龍伯〔花押163〕

川上武藏入道殿

〔朱カキ〕  
〔上書〕川上武藏入道殿 龍伯

966

〔川上武藏守經久譜中〕

〔正文當家有之〕

覺

一河上十郎左衛門尉日記持候て可有參上之事、

十郎さへもんさし合事候ハ、十郎へくハしく申聞ら

れ參上可有之候、

一矢ごたへの日記、

一御當家御代ミノ御手くミの日記

一むかの〔は〕きしたて候日記、

一犬はなしの所作之日記、

先此分ハ必持候て可有參候、其外ノ日記ハ其方心次第たるへく候、御失念候所可有御談合候、

已上

「上書」  
「龍伯様御自筆」

967 「袈裟菊丸常久譜中」

猶々袈裟菊治少へ御れいの儀、事の外安三いそぎにて候キ、ゆたん有ましく候、又めつらしからず候へ共、より拾わけさんニ入へく候、文もしのしるしはかりニ候、

去年九月十七日の御文、十一月五日ニ罷着候、それよりとうりう申候間、返事ちゝ申候、けさ菊身上の儀、たのみのようにけ給候、おほせまでも候へぬよきなき事にて候條、別儀なく候、然共此比ハ武庫しなんにて候、こと更この度ハ何事モ幸侃をたのみ、京儀ヲとゝのへ候と聞え候、幸侃の事、京儀あん内者の事にて候ほとに、定て事よくとゝのをり候へく候、我らハ一かううけ給へらす候間存せす候、かの使モ先下候と申候間、返事申候へく

候、心もとなく候、又うたか事此間ハ色々あたき殿ヲたゝし候歟、あたぎとのよりたゝされ候歟、武庫ヲ申くつし候すると仕候もの天道つもり候歟、安宅殿はてられ候、さてハたのむ所有間敷候ほとにうたハ一定はしり候するかと存候、北郷殿へ覺悟させ申せと安宅殿申られ候間、其分ニ申くたし候、能々たしかに覺悟させられ候へと、幸侃所より申くたし候へと申付候、しせんくらミ候やうニ候てハ、むつかしき事ハけさ菊前ニ參さうニ存候、それよりモ北郷殿へ覺悟よく仕候へと仰られ候て、しかるへく候する、ゆたんにてハくせ事たるへく候、晴蓑かくのことく成候て、きとくニけさ菊かやうニ身躰つゝき、さうニ候處ニ、うたゆへに又々めいわくニ成候する事、なげきの上のなげきにて候する、よくく氣遣尤ニ存候、世間の理法ニモそむき、君臣の道ニモチかい候、さたのかきりの事にて候、一大事ニおほし候へく候、猶かさねてめてたくかしく、

三月廿一日

りう伯

けさ菊うは  
まいるへし

968 「義久公御譜卷末年號不知中」

「案文有之」

急度以飛札申入候、其地御城二之丸火事出來候由、其聞  
得候、誠々驚奉存候、遠國之故運承付、此中延引迷惑仕  
候、先々此等之旨爲可申述、貴老迄如此候、御前可然之  
様御取合所仰候、恐惶、

三月十三日

片桐東市正殿

人々御中

969 「全上」

「案文有之」

急度以使札申入候、若君様被成御煩候由、承付候、如何  
様之御様子御座候哉、千萬無御心元奉存候、遠國之儀候  
故、遅承付早々不申上、相似疎意迷惑仕候、此等之旨爲  
可申入、先々此者申付候、委細御報可被仰知事所仰候、

恐惶、

三月十三日

本佐州老人々御中

970 「義久公御譜卷末年號不知中」

「御自筆正文在山田彌九郎有盛」

昨日町田ぬいヲもて申候齋藤源介か事、油斷不可有之  
候、自然名字名などのまがいもかと存、一筆如此ニ候、  
かしく、

二月三日

龍伯御判

利安

「上包」  
濱之市にて

利安

八代

封

972

「義久公御譜卷末年號不知中」

「上書」 利安  
 「上包裏有」 五大力菩薩  
 「上包裹」 封  
 大すミにて 封  
 はまの市 江  
 まいる 利安 伏見  
 ぶ

971

「全上」

「御自筆正文在山田彌九郎有盛」

幸便之條染筆候、仍齋藤源介、高麗より仰付られ候武者  
 道具、此中さしあたりニてととのへ、則彼之者ニ持參さ  
 せられ候、さてハほととのぶべく候、其間之おんミつ肝要  
 ニて候、よくくかたく其分別あるへく候、猶追而可申  
 候、かしく、

三月廿六日

利安

〇(花押)  
竜(御判)

「正文在國分衆南雲壹岐」

芳染之趣具遂披閱候訖、仍結袈裟之儀構芳意候之由本懷  
 至極候、將又紅糸一斤并硯一面送給候、御懇意難申謝候、  
 猶期後音不能詳候、謹言、

四月三日

(昭高院道灌)  
(花押)

嶋津修理大夫殿

973

「全上」

「案文有之」

追而申候、白密一壺、はりの瓶一双、内花水山枘入申候、  
 山枘者當國へ御座候、玆様子候間進上仕候、可然様可預  
 御取合候、恐々、

卯月十二日

近藤三郎左衛門殿

974

「義久公御譜中卷末年號不知中」

「正文在山田彌九郎有盛」

就出物之儀、去年以來其表ニ堪忍精を入之由、其聞得候、

辛勞之至候、未進糺明之儀、治少老稱敷被仰候、尤同心

ニ存候、弥々可申付事可爲肝要、寔連々奉公無疎意之段、

神妙候也、謹言、

卯月十七日

龍伯○〔花押〕  
〔御判〕

山田越前入道殿

山田越前入道殿

〔上包〕  
山田越前入道殿

龍伯

975

〔全上〕

先日内意之一儀、龍伯様へ御伺候哉、可然やうに被申調

肝要候、謹言、

五月十八日

家久○〔花押〕  
〔御判〕

利安

〔上包〕

利安

家久

976

〔義久公御譜卷尾年號不知中〕

〔正文有之〕

先度寶西堂下國砌馳筆候、抑當門跡先祖寺、貴國在之事

候間、令馳走候様被申付候者、尤可爲祝着候、就中歌道

御執心由連々承及候、與風罷下候而、金玉共聽聞申度望

候、仍扇子二本進之候、將又道舟長々此方堪忍候、唯今

歸國間委曲可被申候也、穴賢

八月廿七日

總

嶋津修理太夫殿

977

〔義久御譜卷尾年號不知中〕

〔正文在高山瑞光寺〕

先年依京儀、寺領悉致勸落、瑞光寺事茂久無縁之儀候之

間、少分之地附之早、右目錄在別幅、將又此度於門派大

979

〔義久公御譜中年號不知中〕

〔正文在國分衆高橋辰左衛門〕

切之一話相傳之儀、近來感悅之至候也、恐々謹言、

長月廿五日

龍伯○(花押)〔御判〕

瑞光寺

〔上包有之〕  
瑞光寺

龍伯

978

〔全上年號不知中〕

〔正文有之御自筆〕

御夢想

いろもかもかせの身にしむたもとな

九月十一日之夜之曉、まきゑシタル御器一ツニ一字

ツ、書之、との夢想也、色も香ももの字ヲ、かさ

ノ五器ノチイサキニ、書タルト見ル也、

龍伯

981

〔義久公御譜卷尾年號不知中〕

〔正文在本田助之丞親長〕

御書謹而拜見仕候、仍於大峯御祈禱之儀付、御刀一腰盛

光被上置候、隨以相届申候、如御尊○(論)愈、當院永々可申傳

候、彌々御家門繁榮、御武運長久之丹祈無之、不可存疎

意候、宜預御心得候、恐惶謹言、

八月一日

賴惠○(花押)〔判〕

進上 修理太夫殿

御尊報

980

〔全上年號不知中〕

〔正文有之〕

就伊地知備前守上洛、拙者江白糸五斤拜受候、御懇志之

至過分令存候、隨而雖左道候、春日野百返令進覽候、猶

期後音可得御意候、恐惶謹言、

九月廿三日

左衛門大夫長治○(花押)〔判〕

謹上 嶋津修理大夫殿

上國刻、種々預御入魂候之趣、御憑敷存候、其以後節、雖可申入候、依遠遠之儀乍存候、仍上意之續、至國々面々宿老中、銘々申展候之處、各以得心被達上聞候、爰元公私共申調候條、寔令満足〔花〕、早々於日州表一勢雖可被差向候、當時豐前目之弓箭聊相支候之故、延引之様候、然共彼弓箭急度可事行之由候間、豐州・肥州之諸勢不相殘、可被差立通承候、如此嚴重之請御内々候之事、前代未聞候、將又霜臺御事、此方御知人中江致物語候之處、何茂御噂耳之由候、旁等〔ママ〕從可被申候、恐々謹言、

十月廿一日

源宗綱〔判〕〔花押〕

本田彈正忠殿

參御宿所

佐々木越後入道

〔上包〕  
本田彈正忠殿

源宗綱

〔本文書ハ「舊記雜錄後編」二六三の一號文書ト同文ナリ〕

「義久公御譜年號不知中」

「案文有之」

猶々任見來縺子三端令進之候、補書面計候、

其已後申隔候、心外候、然者御病氣之由相聞得無心許存候處、頓而被成御快氣候由目出候、依遠方此中御無音罷過候間、彼是爲可申入用使書候、餘者期後信候、恐々、

十月二日

秋月長門守殿

「全上年號不知中」

「正文在本田助之丞親長」

追而從戶次山城守方御具足一領被致進上候、於爰元別而被添心候之條、重々被成〔關字〕御書等、御祝着之段被仰達、御肝要存候、此謂宜預御披露候、恐惶謹言、

十月廿一日

〔佐々木〕  
源宗綱〔判〕〔花押〕

本田彈正忠殿

〔本文書ハ「舊記雜錄後編」二六三の二號文書ト同文ナリ〕

984 「義久公御譜年號不知中」

〔在別紙〕

追而戸次伯耆守方兩郡八人物連署等、以後張行被相調、  
到陣中茂被相添候、同豐州へも親類衆同心差被連候、是  
又御書等重而親方可爲同前候、恐々、

十一月廿一日

源宗綱○(花押)判

(本文書ハ「舊記雜錄後編」二二六三の三號文書ト同文ナリ)

985 「義久公御譜年號不知中」

〔正文有之〕

到義久御札并扇子・杉原・織物・畏悅之由候、仍沈香○亦  
斤書載寔些少之儀候、隨而就御本尊像造加銀百兩、將○亦  
爲愛宕山領水田五町・門二被致奇進候、彼是被表微志耳  
候、委細對秀存坊申達候之間不能重翰候、恐惶謹言、

九月五日

(伊集院)○(花押)  
忠金○(判)

愛宕山長床坊

尊報

986 「全年號不知中」

〔案文有之〕

其已來無音罷過候、然者照高院殿就御逝去、菊之坊迄申  
入候、無案内之儀候間、被成御談合可然之様御取合頼存  
候、將又乍輕薄黑絹二卷令進入之候、誠補書面計候、恐  
々、

十月廿六日

(伊勢貞知)  
友枕齋

987 「義久公御譜年號不知中」

〔正文有之〕

上洛已後無音ニ罷過候、爰元無相替儀彌靜謐候、然者御  
祈念之事無由斷之様ニ憑入候、仍雖不玆候、任求得、仁  
王經二部進之候、巨細者彼者申含候、若輩之事候之間、  
如何ニ存候へ共、口柄細々可被聞届候、猶期後言之節候、  
恐々謹言、

十一月廿六日

龍伯○(花押)  
御判

和光院

988

「義久公御譜年號不知中」

「正文在山田彌九郎有盛」

以上

肝付高山之内ニ田地ニ可成所在之由、其聞得候、然者彼

普請之儀ニ付、村田雅樂助急差下候、(山田有信(功))利安劫者之儀候間、

早ニ彼地へ罷越、雅樂助へ談合を以、普請之様子見合、

寄ミ之人數召寄可致首尾、様ニ肝煎肝要たるへく候、猶

巨細之儀者、幸侃前より可申候、恐ニ謹言、

十二月廿六日

龍伯(御判)  
○(花押)

山田越前入道殿

989

「義久公御譜年號不知中」

「正文有之」

向後者細ニ可申承候、猶此者可申入候、今日者定可

爲御見物候、返酬迄もあるましく候、かしく、

昨日者御立寄之段、人目實満足此事候、殊御酒寄持參候  
て、是又大慶不淺候、早ニ以使者成共可申述候處、餘醉  
無正躰故令延引候、かしく、

(島津義久)  
修理大夫殿

義性

990

「義久公御譜年號不知一冊中」

「正文」

去年不慮に「本マ、」わんおきてへの船、風ニあひ候て、それまで

渡海仕候、殊之外御懇に被懸御意候、大慶不少候、自今

以後、自然之時者、奉憑候外無他候、輕微之至候へ共、

一三たんしゆす、一四たんくわんきんす令進覽候、可然

様ニ預御披露候者、所仰候、恐ニ謹言、

「此所朱印」

たくし里ぬし

(那覇里七)

なはの里ぬし

御奉行所ニ

御中

991 「義久公御譜年號不知一冊中」

「案文有之」

從 御門跡様尊札謹令拜受候、如蒙仰先年上洛之刻、別而忝條と于今恐悅無極候、尤節と可申上之儀、任遠邦乍存候處、剩御筆之三跡和歌被差下候、寔難覃愚意候、仍雖乏少候沈香卅兩令進上之候、宜預御披露候、恐惶謹言、

月日

聖護院殿様へ

慶忠坊宛所

992 「義久公御譜年號不知冊中」

「正文在國分衆伊地知作左衛門」

先度者御懇札欣悅候、明日秀頼へ諸禮候、御出京候哉、然者明晩に御出候て御あそひ候へく候、明日無出京候ハ、いつなり共其方之御隙次第待申候、委曲宗虎に申候、かしく

「宛カキナン」

993 「義久公御譜年號不知一冊中」

「此本浦生衆小山田種兵衛在之」

御狩御鷹野御出之御供衆

御荷内衆 澁谷次郎左衛門 右同 田代甚介

御使衆壹人 御小性衆十二人

御小者衆十二人 御兵具衆壹人

御馬奉行衆一人 御茶湯御笠ノ役 御とうほう衆二人

一御弓十張 十一人内一人手替

一御鐘十本 十一人内一人右同

一御鐵炮十挺 十一人右同

一御長刀 壹人 付衆一人 手替

一御手鍔二本 三人 壹人手替

一野太刀二ツ 三人

「本ノマ、」 一引目三ツ 壹人 一人手替 「本マ、」

「本ノマ、」 同弓 壹挺 同

一御馬二ツ 六人

内おもて口の御馬一ツ但ふたのしつか成馬也

一御ごしかき 四人

〔此所アキタリ〕

御鷹衆

十二人

御犬付衆

六人

御供

川上上野守

同私ノ鷹一もと

祢答院川内入道

同

右同一もと

御鷹取主

右同一もと

志和知形部小輔

永吉采女正

994 「御文庫四拾九番箱二卷中」

幸使之條用愚札候、仍 秀頼様就御煩氣爲御見廻、不圖被成上洛候由、其聞得候、御辛勞之〔到〕無申計候、次者此地駒追御見物有度由承候間、被成御越候へかすと、先刻天草迄以飛脚申候つれ共、右之式候條、不及是非候、寔殘多存計候、猶重而可得芳意候、恐と謹言、

三月廿六日

嶋津修理入

龍伯〔御判〕

寺澤志摩守殿

人々御中

〔義久公御譜卷末年號不知、正文在松山衆養毛七右衛門トアリ〕

995 「御文庫四拾九番箱中」

尙以彼使者廿七日ニ上着仕候條、翌日廿八ニ龜山へ指通、昨日漸歸來候之間、追付今日美濃のことく、和田玄番助相添遣申候、如何様返事可相關候之條、巨細之段追而可申候、以上、

就南蠻船之儀、使僧被差上候間、即彼者龜山へ差越候、治少事ハ濃州へ爲御檢地御下向候之條、先ニ日記之趣三兵被成一覽、無合點之段被仰書狀貳通到來候之間、爲御存知進之候、就中船元江貴所然與無滞留之儀、不屈之由被仰事候、殊幸侃へ一書、無御登儀一段不可然旨、三兵〔三〕被仰候、幸侃茂亦述懷之様相關候、此旨納得候て被入御念尤肝要候、恐と謹言、

十一月二日

龍伯御判ナシ

兵庫頭殿

依無指題目、其後者御無音罷過心外候、仍巢鷹之儀從京都被仰付候間、通道之儀求麻へ度々雖申理候、曾以無合點候、就夫如阿蘇表兩人差通度候、儒者路次等之儀、無其煩様可被仰付事所仰候、兼又隣所之儀候條、何篇御用等於有之者互可申承候、恐々謹言、

卯月十七日  
嶋津入道  
龍伯〔御判〕

加藤主計頭殿  
參  
〔本文書ハ「舊記雜錄後編」二七五一號文書ト同文ナリ〕

997 「御文庫四拾九番箱中」 「義久公御譜中卷末年號不知ノ内也」

當年之御慶珍重々々、仍節々音信之儀令祝着候、然者近日中可致上洛用意候之間、上着之刻何篇可申候、此旨其方かかへも心得有へく候、乍乏少鹿皮五枚進入候、誠祝言之驗計候、恐々謹言、

二月廿九日  
龍伯〔御判〕

「義久公御譜中卷年號不知ノ内也」

998 「御文庫四拾九番箱中」

節々可令啓之處、遠境故無其儀候、仍舊多以兩使如申登候、大友家連々懇望候之哉、引卒他邦被執懸之由、顯然之條、分國覃折角日向堺迄致出張、爲防失軍衆差向候、然者千石殿、長宗我部殿、義統被爲一致之段、其聞得候之間、到右兩〔所〕〔年〕今度出馬儀、縱關白殿雖御下知候、從當家對京都聊不存疎隔上者、何條可有御遺恨歟、用捨肝要之旨、決而雖申渡候、無承引被相懸候、不及實儀、不慮之一戰得勝利、殊豐之衆依敗北亂、千・長諸勢之不〔千石〕〔長曾我部〕分差異、數千騎討果候、案外之〔到〕〔至〕今更無是非候、然共深重爲申入筋者、京都四州之士卒、於府内表無爲方砌、弟中務少輔爲〔島津家久〕慶大船三四艘堅固被遂出船候、不可有其隱候、旁以御遠慮時々可預取合事、所庶幾候、恐々謹言、

正月拾九日  
義久〔御判ナシ〕

宰相殿  
御宿所

999 「御文庫廿二番箱二卷中」

〔御返札ニハ〕

寫改年、豐州・北郷殿・新納殿・典既・金吾・皆御之字ハ一ツ、  
薩州計御二

改年之御吉兆千喜萬悅重疊雖申事舊候、猶更不可有休期  
多幸々々、抑爲此等之御祝儀五明貳本令進之候、倍永日  
中諸慶可申加候、恐々謹言、

正月十一日

修理大夫義久

謹上 薩摩守殿

〔御書ハ御案文也〕

1000 「御文庫四拾九番箱中」

猶々今度於筑州立者、可被成自身出張候之歟、是又  
示預可得其心候、

厥後無音之躰心外之〔到〕候、仍頃從忠棟所注進之趣、筑

紫進退之事、構逆儀候之條、可討果依談合、內端之軍衆、

急速雖可差登由候、巨細以稅所新介可相達之段、就到來

未申付候、當者可伺御神慮哉、菟角御存分之通有之儘、

承候而可得其心候、將又巢本之儀何分相聞得候之歟、京

都へ申登子細候之間、是非以今年者鷹數多見來候之條、

御入魂所希候、彼是爲納得染筆候、恐々謹言、

參月廿三日

義久〔花押〕  
〔御判〕

兵庫頭殿

義久

〔本文書ハ「舊記雜錄後編」二二九號文書ト同文ナリ〕

1001 「御文庫四拾九番箱中一卷中」

從〔關字〕御家門様に相良方、壹張可申組之由被仰下候、先年

顯神名互雖非疎隔候、御意之上者、猶春日大明神・八幡

大菩薩照覽、弥可爲深重事、聊不可有異儀候、以此旨宜

預披露候、恐々謹言、

拾月廿日

義久〔花押〕  
〔御判〕

〔宛切ル、〕

1002 「全上二卷中」

歲暮之御吉詳重疊雖事舊候、猶更萬幸々々、抑就此等之儀、恒例之用佳札候、明春者最前自他之御祝言可申承候、慶事恐々謹言、

拾二月十六日

修理大夫義久

謹上 薩摩守殿

1003 「御文庫四拾九番箱中」

去春八城及遂發足、到其境軍衆少々差向候之刻、無異儀當邦之可爲幕下段、尤以肝心候之處、爲右之御祝詞、使書并太刀、織筋到來珍重候、於弥向後不可有疎意候、猶委細年寄可申候、恐々謹言、

八月四日

義久 「御判ナシ」

内空閑備前守殿

1004 「御文庫四拾九番箱一巻中」

寔先年就不慮之儀申通候、爲其首尾兩使渡海珍重候、然

者到日向表、自豐州軍邪路之于戈候之處、舊冬得勝利、

散鬱念候、此等之〔到〕<sup>◎至</sup>祝彼是御懇切欣悅候、殊向後當家

之可爲幕下由、今度口能之條弥不可有緩疎候、仍太刀・

馬・甲冑進之候、補嘉禮計候、餘者年寄可達之候、恐々

謹言、

五月十五日

義久「御判ナシ」

字久次郎殿

1005 「全上」

今度其境依雜說到已下等騒動之由、風聞如何候之哉、無心元候、縱對此方雖有被疑儀於度々、向後不可有隔心之旨、互神文之上、聊非別義候、猶諸神茂御照覽、從是弥不可存疎體候、可爲御納得事肝要候、委細南林寺へ申含候、恐々謹言、

拾月十五日

義久「御判ナシ」

北郷左衛門入道殿

(本文書ハ「舊記雜錄後編」一〇〇七號文書ト同文ナリ)

「御文庫四拾九番箱中」

今度條と申出候之處、被令納得之由喜悅候、殊更向後被任下知、可爲無二之忠勤之段、具誓紙到來尤以神妙候、從是永と不可有違變候、恐と謹言、

十二月十三日 義久◎(花押)  
〔御判〕

兵庫頭殿

〔本文書へ「舊記雜錄後編三」一五五號文書ト同文ナリ〕

「御文庫拾六番箱壹卷中」

依慮外之弓箭、遙久敷不通罷過候之處、不思議之御越山之由、先以目出度候、何様御滯留中途參會、年來之愚意可申展候、仍内村八兵衛尉子、二人共如内手之被召越候、爲其返報相當候人質相留、雖可申理由候、我々此等之分申閉目可差遣候之由、申候て押置候、是非如此御和平之時者、以御調法、貴所御逗留中ニ御返遣候ハ、可目出候、若於無尔々者、無分別者共、□さる爲何儀出來申候てハ、可爲曲事候、爰元之被成御遠慮御入魂專一候、巨

細瀧聞藤七兵衛尉可被申之條、不能詳候、恐と謹言、

九月三日

兼盛◎(花押)  
〔御判〕

忠元◎(花押)  
〔御判〕

勝軍坊

御同宿中

肝付彈正忠

新納刑部大輔

勝軍坊

御同宿所

忠元

「御文庫拾六番箱壹卷中」

誠今歳之嘉祥千喜萬悅自他以不可有濟限候、抑去署月、貴國之浦船◎至〔到〕當邦着津候、則差加船致渡海之處、今度爲報禮、尊使剩對大守◎(關字)勅書被令拜受候、感聞之段歡喜無極拵躍有餘者也、最往昔以降會盟之辻曾無愀違永と弥可爲甚深事本悅候、隨而綿九斤祝着候、從是茂中紙九束進獻之候、聊表心緒計候、恐と謹言、

卯月三日

伊集院  
忠金

琉球國

三司官

「義久公御譜年號不知中ニ此同文アレトモ月日名宛ナン、文字二三字異同アルノミ故寫サス」

(村田) 經定  
(川上忠克) 意釣

被申越候處、萬一御得心於相滯者、大國迄之覺如<sup>◎</sup>何<sup>△</sup>之條、以御遠慮示預候者祝着可被申候、猶期來喜候、恐々謹言、

八月廿五日

(田原) ◎ (花押) 親賢 [判]  
(白井) ◎ (花押) 鑑速 [判]  
(志賀) ◎ (花押) 親度 [判]  
(佐伯) ◎ (花押) 惟教 [判]

河上ニ野入道殿

嶋津攝津守殿

村田越前守殿

伊集院源介殿

平田美濃守殿

伊集院右衛門大夫殿

御宿所

追而到伊集院右衛門尉殿、鑑速雖用先書候、御返事遲滯之條、衆中申談重疊用連署候、爲御心得候、今度到南蠻被差渡候船令歸朝、於御領中繫置候之處、去大風之砌、少過之子細有之由依到來、到貴殿以使節被申候之處、未御返事候之事無御心許候、如御存知、貴家當方御代ニ被得御意候之處、以聊之儀可被及御隔心事、他邦之嘲自他不可然之條、速ニ可被成御分別事、尤可目出候、然者彼船於南蠻國茂、如此節少難之儀雖有之、從宗麟被差渡船之段有存知、彼國守以相談廉直之扱、剩以使節

佐伯紀伊介  
志賀安房守

白杵越中守

田原近江守

伊集院右衛門大夫殿

河上御宿所野入道殿

親賢

(本文書ハ「舊記雜錄後編」一六八五號文書ト同文ナリ)

1010 「御文庫拾六番箱三卷中」

貴家義陽御和融之儀、疊重爲可申入態以書狀被申候、具被聞召被成、御納得候様ニ御取成所仰候、委細依御返事可被得其意候、仍頃者無音罷過候、何條御事共候之哉、尤連ニ雖可申入候、遠方故乍存候、非疎略之儀候、幾日不通候共御同意可目出候、然者此方行等之儀用口上候、定可相達候之條不能細書候、萬端可預御入魂事所希候、猶重ニ可申承候、恐ニ謹言

(鍋島直茂◎(花押) 信昌(判))

四月廿一日

平田殿

村田殿

伊集院殿

參御宿所

1011 「御文庫拾六番箱三卷中」

一御間成下之事、

一公儀御名乘之御字、其外御入魂次第□御相違之事、

一大阪ニ御座之刻、御間御扱之様子之事、

一三家阿州衆并佐々木朝倉言上之次第、付誓紙進上之

事、御返事之様子條々之事、

一至越州御下向之次第之事、付還御之次第、

一其以後至丹州御下向之事、

一織田彈正忠與御扱之次第、付無御入眼次第、

一今度御上洛之事、

一去々年以來公儀御懇望之次第、

一從甲州御間御扱之次第、付無御許容次第、

一對信長御入魂之上者無二之御覺悟之事、

一御敵方不可有御許容事、

一公儀備前國雖御頼候同心不申次第、

一貴久爲御弔御使僧之事、

一日向之國之事、

以上

〔并壹通年月ナシ〕

1012

〔御文庫拾六番箱四卷中〕

就 御入洛御調略之儀、被成下 御内書候、謹頂戴誠冥

加惶多令存知候、仍沈香拾斤段金一端致進上之候、可然

様宜預洩御披露候、誠惶誠恐謹言、

十一月十二日

〔善心〕  
攝津守季久◎〔花押〕

眞木嶋玄蕃頭殿〔昭光〕

進上

一色式部少輔入道殿〔藤長〕

〔本文書ハ「舊記雜錄後編一」七六三號文書ト同文ナリ〕

1013

〔拾六番箱卷中〕

爲今歲之至祝、御使節尤珍重候、殊到拙者、芳書并太刀

鞆・被懸御意候、畏悅此事候、然者過春之比、就弓箭之行、

兩使下着候、其筋聊以無油斷候、因茲忠平去月已來在八

城之一着候、被遂御熱談、諸口御賢慮不申及候、從爰許

茂不可有疎遠候、仍任見來驚羽一尻令進覽之候、補嘉瑞

計候、恐々謹言、

七月十二日

〔本思〕  
親貞

秋月殿參

御返報

〔本文書ハ「舊記雜錄後編二」五四號文書ト同文ナリ〕

1014

〔御文庫拾六番箱四卷中〕

猶々萬事於貴國ハ奉頼計候、以上、

乍恐令啓上候、

一今度大坊爲御使御上洛候、御國之様子承候而目出度奉

存候、京都之儀共具ニ御下衆可被仰候間、不及申上候、

小四郎爲御見廻罷下度由申候間、差下申候、萬被添御

心候て御引廻奉頼外無御座候、若キ者之御事候間、一

圓ニ届申間敷候、無心許存計候、

一武庫様御在京候、御内衆之御衆、何も何事無御座候、

一段各御馳走候、御心安可被思召候、御屋敷御ふしん御用意御心つかい可成候、萬笑止成儀に候、何共く不被申分候、御國衆へ何共なく我等不届様被仰候へ共、又我等存儀共候間、小四郎ニ其分申候、無理道理之事御徳心奉頼候、

一 幾重も返ミ頼候、龍伯様御前御取合を奉頼候、世上之仁口を存、萬不入御意事申様、可達 上聞事迷惑千萬候、以後ニ相濟可申候間天道迄候、

一 宗易御成敗、女房子供へ一人宛御預りにて御糺明候、

宗易女房ハ石田殿、もすや宗安女房ハ小西殿一人、玄

二 法印是ハ紹悦とやらんか女はうと申候、今一人ハ又福原殿と哉らん、御預り候て萬御糺明之由候、其故者

紫野和尚達皆ミ御走候、 關白様御道理と申さぬ人なく候、

一 近比指出たる申上事にて候へ共、又一様御上落も無御油斷様專一ニ存奉候、武庫様ハ秋迄ニ御意候、左様ニ可在御座候へ共世上からハ何もくかミさま達御在京

候ハ、又一様何も左様無御座候事如何申候、承儀候

而如此候、無用と思召候ハ、御沙汰なさるましく候、

返ミ預御知せ候共、他言ハゆめく仕間敷候、奉

頼候事候、恐惶謹言、

三月廿八日

宗固〔判〕〔花押〕

道正

拜上 本坊様

御同宿御中

宗固

1015

〔御文庫拾六番箱四卷中〕

一 大閣様御藏入收納分量之事、付治少藏入分量之事、

一 恕參寺之事、

一 高麗平戸川内ニ被食置上米始末之事、

一 般若寺之事、

一 龍伯様 義弘 忠恒、上落供衆つもりの事、

一 忠恒越年所調之事、

一 濱之市并蒲生へ被食移人衆付之事、

一 御軍役御談合之事、

一 諸地頭分私領ニ被食成、各へ被下候由候、必定ニ候哉  
之事、

一 藤次郎殿母へ知行遣候事、

一 福永宮内少へ知行遣候事、

一 澤原野牧之別當之事、

一 伏見御屋形作之事、

〔年號知レス〕

1016

〔御文庫拾六番箱四卷中〕

改年之御慶可被任尊意候、伽羅沈香三兩送被下候、過

分之御儀候、宗運志之木ニ相違候、則試申候、勝たる

香にて候、

一 假名遣届申候者本望候、筆者誤あるへく候、重而御不審

候ハ、可承候、不慮之亂逆候者不及是非候、御氣遣奉

察候、

一 里村五郎八事、昌叱〔本マ、〕ともむつまじからず候、心たけく

候て戦死本望たるへく候、昌叱さのミ心にもかゝるま

しく候、手前無比類せめてにて候歟、

一 たくさの事、しかく不覺候、一句承度候、重而承度  
候、

一 京都之事靜謐候、近日御連歌共候、

政所様御夢想なと候て、昨日迄ハ間韻連歌臥見兩三度

罷下候、老身無正躰草臥候、うたひなと醉中ニハ候へ

共、去年正月臥見にての事申出候、只々御上落ハある

ましく候、別而御床しく奉存候、

一 扇壹本進上候、表祝儀迄候、此旨御取成所仰候、恐惶

謹言、

正月廿三日

臨江齋判

龍伯尊前御番衆中

1017

〔御文庫拾六番箱五卷中〕

的便之條啓達候、先年以使者被申候處、公私御懇情、殊

琉球御勘合之儀、依御取成、義久様御領掌之段、畏悅

之旨、永興寺御歸國之刻、先書ニ被申候、猶一札如此候、  
各江相心得□申由候、判形被相替候間、御不審有間敷候、  
裏書之儀御理、兩使ニ被仰含由候條、被應尊意候、其後  
渡船有遠慮之筋遲引候、一兩年中可有其企候之旨候、此  
等之趣御披露肝用候、恐ニ謹言、

卯月廿八日  
明宗◎(花押)[判]

伊集院右衛門大夫殿

村田越前守殿

川上左近將監殿

御宿所

〔義久公御譜卷末年號不知中正文有之トアリ〕

1018  
〔御文庫拾六番箱五卷中〕

畏言上 抑御祈禱一萬度、御被大麻并土產進上仕候、致  
祇候、雖數年之御禮可申上候第門者、召違之候、然者大  
神宮御造營、諸國以御奉加可事調候、一廉被仰付、御領  
國預御下知候者、自何以御神忠數代御師且都鄙之外聞  
實、忝可畏存候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

1019  
〔御文庫拾六番箱五卷中〕

進上 御奉行所

五月吉日

元昌◎(花押)[判]

〔義久公御譜卷末年號不知中正文有之トアリ〕

猶ニ御祈念之儀共可奉抽丹誠候、

乍恐令啓上候、披俄ニ入峯可仕覺悟候、幸之儀候間、御  
祈念之事可被仰付候、於峯中今嘸精誠別而如意御成就、  
御祈禱可申候條、懇ニ此者ニ可被仰下候、隨而當山之炭  
貳荷進上候、誠表御祝儀迄候、猶追而可得御意候、恐惶  
謹言、

八月吉日

盛雅◎(花押)[判]

嶋津入道殿

參人々御中

鞍馬寺シレス

妙壽院

嶋津入道殿

參人々御中

盛雅

〔義久公御譜卷尾年號不知中正文有之トアリ〕

1020 「御文庫拾六番箱五卷中」

鞍馬寺本堂爲御修理、勸進差下使僧令申候、仍毘沙門尊像并御札薄板物壹疋令進覽候、猶以御武運長久御祈禱奉抽精誠之間、萬端可爲御満足候、尙追而可得貴意候、恐惶謹言、

八月三日

薩摩守修理大夫殿

人々御中

客全〔判〕◎(花押)

鞍馬寺

妙法坊

薩摩守修理大夫殿

人々御中

客全

〔義久公御譜卷尾年號不知中正文有之トアリ〕

1021 「御文庫拾六番五卷中」

奉任御嘉例、抑御祈禱卷數并牛王寶印致進上候、倍御武運長久御國家安全之抽悃祈候、隨而織筋一段誠奉表御祝儀候、此謂宜預御披露候、恐惶敬白、

九月吉日

伊集院右衛門大夫殿

連長〔判〕◎(花押)

〔義久公御譜卷尾年號不知ノ中ニ在リ〕

1022 「御文庫拾六番箱五卷中」

尙以貴國致滯留候儀、御厚恩忝奉存候、

乍恐令啓上候、仍當國八十嶋助左衛門尉事、下着之儀候之條、捧一書候、此方致逗留候處、御留主役人衆被入御念候而御心付候、忝次第ニ候、愚身事此躰ニ御座候へと、爰元一日ノ續命候儀、御厚恩と奉存慮候、何様御下國之刻可申上候、恐惶頓首、

九月七日

宗句〔判〕◎(花押)

進上 龍伯様人々御中

勢田掃部入道

進上 龍伯様人々御中

宗句

1023 「御文庫四拾九番箱中」

態令啓上候、今度大明與御無事付て、於朝鮮都通詞候事、  
兵庫頭殿へ申入候へハ、右馬頭殿より一人被相渡候、則  
其者勅使ニ被付置、近日釜山浦へ罷渡候、彼在所ニ而、  
親弟ニ夫役地下之役儀申懸候付て、致迷惑候由申候、定  
而過分之儀ニてハ不可在之候之條、已後多諸事用捨候様  
ニ、彼代官中へ御墨付、急度被遣、可下候、乍推參案書  
相調進入候條、被引直候て可被遣候、爲其如此候、恐惶  
謹言、

六月十九日

正澄(花押20)

龍伯公

人々御中

石田李頭

正澄

1024 「御文庫四拾九番箱中」

猶々依無好便久不能書信候、扱々今一度懸御目度念  
願迄候、年寄病者ニ成申候躰にてハ可令下國事ハ不  
可成候かと無念候、猶吉事可申下候、

未當年者不申承候、朝暮御床敷存候、一段息災ニ御入候  
由、御同名又四郎被申候間、何より〳〵肝要ニ目出度令  
満足候、扱々我等年寄病者ニ成申無正躰候、筋相煩、腰  
立かね行歩不自由候、一町とも歩候事不成候、此躰ニ候  
へとも、鷹ハ執心不止、自然ハ山へも野へも籠にて出見  
物申候、馬をハひかせ申候躰はかりにて、籠をハ不出候、  
おかしき躰御推量之外候、よき鷹共令所持候をも難去、  
皆々所望申持(續)候、給候鶏子今秘藏申候、如御書中よ  
く取申候、京廻ニハ鶉まれニ候て、物數ハ中々不成候、  
もし取損候へハ、わたりかね殊更立はしり候間、一をと  
く事いかゝとかたく申付候、京都ハ鷹すへあけ候へハか  
くし不申候、此鷹のなんへきつく候て氣遣候、并給候犬  
一段よくかゝ候て秘藏申候、犬數八十はかりも方々より  
くれ候へ共、給候犬ニまさりたるハ無之候、奥州より四

メ  
老「龍伯老ナルヘシ」

五年以前ニ男犬つかれ一給候、一段人くらひにて候つるか、野も山もよくかミ申候つるか、相煩候て當年春死申候、殘多候、然而又四郎、大二疋給令祝着候、菟角御國之犬よくみえ候、大鷹も御國ニ出來家康へ被進候、以來も度こうちおとされ候由候、殊半子去年之鷹被打落候由候、大鷹にてもなく、兄鷹にてもなきへ、半子とも、はしたいとも申候歟、はしたいハ少秘事之やうニ承候、今ハ存たる者無之候、兄鷹ハ御嫌之由候つる、弟鷹ハ中々望も不成候事ニ候、若明年にても、さ明年にても、兄鷹かおとし候ハ、拙老命之中ニ見申度候、西國鷹各別候、東國鷹御用ニ者令馳走下可申候、馬ハ珍敷ハ無之候歟、拙者も只今一二疋如形之若馬令所持候、懸御目度候、次此筆十對・油煙ニ、當時一興ニ候、誠空書を補候躰計候、猶追々可申候、已上、

五月三日

◎(花押)  
〔判〕龍山公御判也

1025

「御文庫四拾九番箱中」

尙以大隅・薩摩兩國之帳之分、其代官給人へ被仰付、其方として惣之しまりを被相究可被上由候、一郡あての繪圖をも被仰付候て、可被成御上旨御誼ニ候、以上、

爲御意急度申入候、御國之御知行御前帳調上可被申之旨、被仰出候、則御帳之調様一書別紙進之候、來十月以前、被仰付可有御進上旨候、諸國へ如此何も被仰出候條、御手前不可有御油斷候、恐々謹言、

五月三日

長東大藏大輔◎(花押)  
正家〔判〕

増田右衛門尉◎(花押)  
長盛〔判〕

石田治部少輔◎(花押)  
三成〔判〕

民部卿法印◎(花押)  
玄以〔判〕

薩摩待從殿

人々御中

「御文庫四拾九番箱中」

又内々新造御振廻申入度と申候事、以勝吉郎何時ニても可有御出候由被仰候とて、七日八日兩日之中と申てくれ候へと申候へ共、既明日、大坂のごとく御下にて候間、御上候節、これも可令張行候由、相心得可申旨候、客來故令省略候、

御札令披見候、仍昨日者賀茂競馬足汰爲御見物御出之由、御慰與存候、拙者も御跡より可參とたく見申候處、難去事俄ニ候て打過申候、就其御再返一段殊勝ニ存候、則書付禪林寺へ遣候、將又節供爲御禮、如大坂明日御下向候之由、御苦勞ニ存候、大黒可牽候趣尤之被仰付様ニ候、惣別馬鷹ハ二〇おしめと申習候、當時ハ大名之馬所之太守もよき馬をハ人ニ遣かね候て、おしミ惡馬、さてハくせ馬の用ニ不立思所のあるならてハ不遣候由、申沙汰にて候、御意ニ入たる馬にて候ハ、たれく縦申請候共、御同心候ましく候、次禪林寺之連歌十日比ニ候、御上洛候ましきかのよし、いつにても貴老御歸京次第ニ

候、長老も、貴老を申入度との會興行まてにて、御發句

「シレス」

へき被申候へ共、御理之間、然者御發句の代ニ脇を御沙汰候やうとの念にて候キ、いつにても御歸京之刻たるへく候、猶期其節候、今日ハ聖門師弟子一條殿・祐乘・友枕などこれへ來臨にて候、旁追而可申入候、かし

乃刻

山「龍山公ノ事也」

伯老

御返事

1027 「御文庫四拾九番箱中」

其方御心底之通、今度以莊嚴寺、細々示給候、祝着此事候、然者則北原方へ談合候之間、以得心般若寺別當爲使節被申候、彼依旨意趣、其方之相談可爲肝要候、此方之事弥以其之父子憑存候、覺悟之外更無他候、細碎莊嚴寺可被申之條不能審候、恐々謹言、

文月廿五日  
(鳥書) ◎花押  
 勝久「御判」

相模守殿

〔本文書ハ「舊記雜錄前編」二二三八二號文書ト同文ナリ〕

1028 〔御文庫四拾九番箱中〕

〔本文書ハ八七三號文書ト同文ニツキ省略ス〕

1029 〔御文庫四拾九番箱中一ノ巻〕

珍札本望候、京都未靜謐候條迷惑邊推察候、抑彼間事懇承候、一段祝着候、弥可然様頼入候、兼又各手詠進候、巨細猶筑後守可申候、每事期後音候也、狀如件、

十月十九日 〔近衛尚通〕  
〔花押山〕 〔尚通公〕

嶋津修理大夫殿

1030 〔御文庫四拾九番箱一巻中〕

雖無指儀候、の便之間染筆候、其元弥無異儀由珍重候、仍去年差下進藤筑後守候處、諸事預馳走旨其聞候、喜悅之至候、爰元無外方躰候間、萬端引立頼入計候、猶顯娃左馬助可申之間不能巨細候、恐々謹言、

八月十四日 〔花押109〕〔尚通公〕

修理大夫殿

1031 其後者疎遠之至背本意候、仍官途事遲々如何之間申調候、尤珍重候、就中短册十枚雖憚多候、染惡筆進之候、

尚進藤左衛門大夫可申候也、狀如件、

三月十三日  〔竹内御門跡〕

嶋津修理大夫殿

1032 〔御文庫四拾九番箱中〕

去五月晦日之貴札今月廿日到着拜見珍重候、如示蒙候、依海路遼遠從是も無音押移候、聊非心疎候、仍貴國牛草之城、相良方依加勢相拘候之處、被執詰當時者彼表悉被屬御勝運候之由候、千秋萬歲候、向後於相應之儀者、可申談候、每事御入魂所仰候、隨而御太刀并御馬贈給候、

何樣可致秘藏候、然者太刀一帶・織物一端令進獻之候、

誠補御禮計候、心緒猶伊集院善左衛門尉方可令演說給

候、此旨可得御意候、恐惶謹言、

十貳月廿四日

(有馬)  
義純(花押)

嶋津殿

貴報

1033 「御文庫四拾九番箱中」

懇令啓入候、任先例之旨、近年請上意候處、公私御丁寧

蒙仰候、外實忝奉存候、尤節「本マ」可申上候處、且者遠方且

者依途中難成子細候、乍存候、聊非疎略之儀候、仍而去

々年當郡之立柄、就中久玉落着之儀、遂言上候處、具被

成上意候、存其旨、到天草大夫義虎御同前彼和融之儀申

達候、彼方然與純熟被申候、然處無程以計策久玉知行候、

拙者不閉目罷成候、悉失面目候、既薩州天草際及弓箭候、

此堺同篇候、雖無申迄候、大口御靜謐之刻勵心底候事者、

御存知之前ニ候之條、不及巨細候、右以御用捨可被達

上聞候事奉頼候、猶用口上候、恐々謹言、

十一月廿八日

(志岐譜經) (花押)  
麟泉(判) (志岐兵部少輔入道也)

伊集院右衛門大夫殿

村田越前守殿

平田美濃守殿

河上上野入道殿

御宿所

1034 「御文庫四拾九番箱中」

今度從豐州到南蠻國被差遣候御船、既歸帆之刻、於御領

中、少々風破之由絕言語候、然者就彼船之儀、兩國可被

相及御等閑之通、甚以不可然之儀候歟、就中當時其堺御

弓箭之儀、向後者到豐符被遂御旨趣、從此表一行被仰促

哉否之由、相存候處、覺外之御題目寔令仰天候、一者御

代々骨肉之好、于今無異儀可被仰談事、乍恐所希候、拙

夫事、依伊東闔國近代雖違幕下候、前々之持節難忘之條、

不願惶令言上候、笑右之船被成御調儀、永々於御一致者、

終可爲日州御退治之基候、那此等之趣、可然樣御披露所

仰候、恐惶謹言、

十二月六日 親成◎(花押)

伊集院右衛門大夫殿

1035 「御文庫四拾九番箱中」

今度言上仕候之處、別而御懇上意、忝面目之到候、併各御◎取召合故候、畏悅不少、殊近比見事御馬被下候、外聞之至不可有此上候、秘藏可異于他候、仍薩州當方和談之儀被成御異見候歟、就夫被仰遣候之趣、得其意候、於子細者、到新納武藏守◎殿〔許〕申談旨候、定而可被聞召候◎(ナシ)〔之〕哉、益可被添御心◎候之事所希候、於向後深甚可得御意候、

每時御指南可爲大慶候、恐と謹言、

十一月六日

(天章) 鎮尙◎(花押)

喜入攝津守殿(季久)

河上前上野入道殿(忠克)

村田越前守殿(經定)

平田美濃守殿(昌宗)

伊集院右衛門大夫殿(忠棟)

御報

(本文書ハ「舊記雜錄後編一」八九六號文書・九〇八號文書ト同文ナリ)

1036 「御文庫四拾九番箱一卷中」

急度言上仕候、仍伊東無程被成御退治候、寔と千秋萬歲候、尤遂出頭御祝儀雖可申上候、先と以同名相模守令申候、隨御鎧一領・甲一勿同毛進上候、表御賀例計候、此等之趣可然様御披露所仰候、恐惶謹言、

十二月廿六日

親成◎(花押)  
〔土持氏也〕

伊集院右衛門大夫殿

1037 「御文庫四拾九番箱一卷中」

歟后者杳不申承候、遠路之條非疎意候、仍今度於日州表、被得大利平均被仰付候由、京都無其隱、乍寄特難紙上盡存候、尤使者差下申度、乍心緒、信長殿御手遣付切と御上洛之條、執紛不及是非候、境節從愛宕好便と申候間、乍自由令啓達候、於爰元相應之御用可被仰上候、猶右衛門大輔可被申入候、恐と謹言、

六月十八日

雅繼判ナシ

嶋津修理大夫殿

修理大夫殿

十一月廿六日

尚通公◎(花押)  
〔判〕

1038 「御文庫四拾九番箱中」

義久相良方間和陸之段、每度雖申入候、然と無一着候、  
乍去重疊申入候、此節以御納得落着候様、御取合可目出  
度候、我等意分、彼者含口上候、恐と謹言、

八月二日

隆信判◎(花押)

伊集院右衛門大夫殿

御宿所

1040 「御文庫四拾九番箱一卷中」

日向巢若鷹所望候、於到來者可喜入候、次小袖遣之候、  
委細藤孝可申候也、

六月十六日

(足利義昭)  
◎(花押)

嶋津修理大夫殿

1041 「全上」

追而鎧・甲預候、令祝着候、自是茂太刀一腰弘恒・馬一  
疋河原毛印鷹金誠表徵志計候、恐と謹言、

八月廿四日

修理大夫義久判◎(花押)

謹上 大友左衛門督入道殿

1039 「御文庫四拾九番箱中」  
尔來不申通候、其國之儀、弥被屬本意之由、玆重候、抑  
今度京都依不慮之錯亂家領等令相違候、殊更前相國御逼  
塞之段、恐怖此事情、雖虛名當時之爲躰不及力候、彼是  
在洛難相續趣候間、此節以憐察、於預助成者、偏家門可  
爲再與候、將又色紙三十六枚親王御筆、次板物二端・引

合十帖、進之候、猶進藤筑後守可申候也、恐と謹言、

1042 「御文庫四拾九番箱中」

猶と彼御談合忠平様御存知之儀候間、即時申上候、

日取等ハ未仕候、鹿兒嶋へ今日申上候、爲御心得候、

急度申入候、然者今度本田刑部少輔方以到三舟合志北日

働之事申越候之處、宗運返事以外無得心候、殊本刑於宿

本惡口狼籍之事、不及申候、春已來度、使節雖差遣候、

如此之儀無之候、其外様子之分、本刑見及被申候之趣、

必定可爲御敵候歟、菟角不可有御油斷由被申候、又北日

働之事も合志殿ハ納得候、乍去宗運分別次第候、宗運於

無入魂者、前後心遣可仕候間、北日働無是非候、御存知

之前たるへき由被申候、又有馬境之儀も差無御行候、此

節無仕合候者、諸口惡事可出候歟、去年已來忠平様御存

知候、近所之事頃見せ候も不替候、今度ハ同名日向守相

添、岸きハ迄忍寄候、隙入間敷由申候、然者彼行可然候

する哉、爰元談合衆申され事候、爲御存知之候、貴所迄

先々如此候、恐々謹言、

九月十三日

忠棟◎(花押)  
(判)

伊集院右衛門大夫

有川雅樂助殿

御宿所

忠棟

1043 「御文庫四拾九番箱中」

舊冬企飛脚候之處、委細蒙仰之通得其意候、仍就天下靜

謐、小早川・吉川事、到大坂不圖差上之改下向候、然者

九州之儀、諸家有無事、京都被遂馳走候之様、可致助言

之由候、心蓮坊被指上之由候條、關白殿御下知之趣相副

一人可申談候、猶期後音候、恐々謹言、

正月廿五日

(毛利)  
右馬頭輝元(花押)

謹上 嶋津殿

1044 「御文庫四拾九番箱中」

御書拜見仕候、仍而今度齎償之御弓箭御儀定之由、千勝

萬勢、乍恐忤家本望此節候、何様相應之馳走不存緩候、

然者被仰出候趣慥致承知、到兩家申渡、彼意分稅所新介

殿迄申入候條、定而可有言上候、此由可得貴意候、恐惶

謹言、

三月二日  
(秋月)◎(花押)  
種實(判)

嶋津殿參  
貴報人、御中

1045 「御文庫四拾九番箱中」

謹言上仕候早、抑今年之御祝儀重疊不可有休期候、殊諸  
邦被任尊慮候、御靜謐千秋萬歲候、隨而御太刀一腰金覆  
輪、縮五端令進上候、表御祝儀計候、此等之趣宜預御披  
露候、恐惶謹言、

卯月十二日  
(松浦)  
肥前守鎮信(判)  
進上 本田下野守殿判

1046 謹而致言上候、抑先日者眞蓮坊就被差上、我等式迄被成

御書、御丁寧之儀忝候、隨而今度 關白殿被遂御對談、  
鎌田殿御歸國尤珍重候、當時之儀乍恐不可過御賢慮候、  
猶伊集院右衛門大夫殿可有御披露候、恐惶謹言、

五月十一日  
(小早川)◎(花押)  
左衛門佐隆景(判)

謹上 伊集院右衛門大夫殿

1047 「御文庫四拾九番箱中」

筑前國箱崎八幡宮之事、往代當門跡由緒之舊領候、如元  
被加還附之下知候者、別而可爲武運長久懇祈候、猶申合  
仁秀法印候也、

五月廿八日  
(最勝親王)  
(花押186)  
嶋津殿

(本文書ハ「舊記雜錄前編」一七三六號文書ト同文ナリ)

1048 「御文庫四拾九番箱中」

厥以后者久無音候、誠以非本意候、切可申述候處、的  
便難計故無沙汰耳候、何様明春者令下國諸事可得貴意  
候、抑此妻紅扇二本送進之候、恐々謹言、

九月十五日  
(奉朝法親王カ)  
(花押187)  
修理大夫殿

1049 「御文庫四拾九番箱中」

内ニ申候、堀池父子只今令下國候、拙者被官候、別而懸目者之事情之條、可然様憑存候、猶貞知・宗固可申越候、恐ニ謹言、

三月五日 (花押印) 「前久公也」

修理大夫殿

「義久公御譜卷末年號不知ニ入」

1050 「御文庫廿二番箱一卷中」

琉球へ之老中案

就會盟符改之儀、被成尊書并廣濟寺渡海候、任往古之例、如東恭西華北南星斗、弥堪之儀所希候、仍此國依無干戈休期、近年往還之商人無正躰候、向後不帶正印渡船之族者、船財物等可爲 貴國公用候、猶於可被加制止儀者、御入魂肝要候、諸事雪峯長老可有演說候、

琉球國三司官

1051 「御文庫廿二番箱三卷中」

我朝之武家有一秘術、名小笠原流之書、武家之業其術者、往ニ欲觀之而未觀之者惟多矣、予也得其方術、直招小笠原正之之人、匪啻效之使其數十卷之書一ニ寫之、後之觀者、深秘而韞之於匱幸也、

年月日

御名乘御判

1052 「御文庫廿二番箱七卷中」

御上洛之由、唯今承候、曾以不存候キ、先ニ珍重候、將御上洛之由、唯今承候、曾以不存候キ、先ニ珍重候、將  
〔又〕先度者御懇之儀共、難忘候、御隙透來臨、可爲本望  
候、必待入候、何様從是も可參候、旁期面謁之時候、恐  
ニ謹言、

(天正十八年カ) (近衛前久)

五月五日 (花押印)

(義久) 龍伯

(本文書ハ「舊記雜錄後編二」一一一九號文書ト同文ナリ)

1053 「御文庫廿二番箱十卷中」

以先札此方用織、於稽古者一人も無之候間、本田與左衛門尉へ太刀目錄様子可被仰聞之由申入候處、彼者不例故不罷出由候、扱者彼使平田弓兵衛尉へ得御指南、度々於有入魂者、可爲祝着候、委曲者口狀含候間不詳候、恐々、

正月十三日

友枕齋

〔御譜卷末年號不知内也〕

1054 依遠邦其已來御無音罷過候、本意之外候、先以一段御勇健之由千萬目出候、然今度甚堯上洛仕候、傳受方之儀可

被添一心事所仰候、仍何々令進覽之候、委曲者彼僧含口狀候間不詳候、恐惶、

二月十三日

岳西院僧正

〔義久公御譜卷末年號不知内也〕

其已後御無音罷過候、失本意候、然者度々被遂御祈念、札守預候、寔御懇意之儀難申盡候、萬事取紛念々御禮不申入候、所存之外候、仍何々令進覽之候、委曲者彼僧申達候間不能一二候、恐惶、

正月十三日

中性院

〔義久公御譜末年號不知内也〕

1056 猶々綾五端預候、珍重候

此御方爲御名代、以勝光坊御見廻畏入存候、連々於觀世音御寶前、御懇祈之由弥御精誠所仰候、仍舞臺爲再興銀子拾貫目勝光坊へ渡進候、作事急度被仰付度候、猶口上申候間不詳候、

三月九日

清水寺

成就院

〔義久公御譜卷末年號不知内案文有之トアリ〕

1055 〔御文庫廿二番箱拾卷中〕〔義久公御譜年號不知内入〕

1057

「御文庫廿二番箱十卷中」

今度者被成御越申承、多日之本望此事候、誠ニ遠路被思召立御尋之儀、存程御禮不得申候、御歸路之刻者大雨ニ而御難儀察存候、今少雖抑留申度存候、何等之珍儀無之故、不能其儀、千萬殘多存候、猶期後音候、恐々、

卯月十二日

相良左兵衛佐殿

「義久公御譜中年號不知内也、案文有之トアリ」

▽◎  
熊野へ

老中案  
△

1058

先年御戸開之儀、神力山伏如今不及是非候、依其謂重疊對鈴才申理候、巨細納得之條、今度銀子一貫六百目分儘渡進之候、然間右一通之儀者聊不相殘候、互證文執替快然之到候、仍忠棟其外雖可爲同判候、他行之儘拙者申達候、細碎才丞殿可有演說候、

五月十八日

堀田新次郎殿

「義久公御譜卷末年號不知中正文有之トアリ」

「朱ニテ熊野へ老中トアリ」

1059

「御文庫廿二番箱十卷中」

就 [ ] 原房罷登候、乍次別護广一座可致修行心底候、別而御懇祈所希候、隨而任佳例蝶貝ニ進覽之候、猶巨細者含口上候、恐々謹言、

五月廿四日

三輪山  
先達

「義久公御譜卷末年號不知中案文有之トアリ」

1060

從 御門跡様被成下 御書候、殊更妻紅扇二本忝令拜受候、誠珍惠至極候、節々雖可申上候、任遠國相紛疎懷候事慮外候、仍何々致進上之候、此旨宜預披露候、恐々、

六月廿八日

井關殿

「大覺寺殿へ御返書案」

「義久公御譜卷末年號不知中ニアリ、案文有之トアリ」

1061 「御文庫廿二番箱十卷中」

先日者不圖被成越着遂閑談候之事、于今本懷候、殊御能度々致見物驚目候、倍殘多存計候、此等之子細尤早速雖可申展候、從京都重疊被仰下儀候條、取紛遲怠之儀、慮外之至候、猶萬端追而可申達候間不能詳候、恐々、

七月

秋月宗闇

「義久公御譜中年號不知ノ中也」

1062 當年之御慶珍重々々、仍先日者我等繁昌共候、爲祝詞種々御懇意之儀共畏入存候、其已後手前取紛、彼是御禮申後所存之外候、將又太刀一腰・馬一疋・生糸一丸進覽候、聊表御祝儀迄候、猶口上申候間不詳候、恐々、

八月

大村殿

1063 「御文庫廿二番箱十卷中」

先日者年少相煩候處、被聞召付、遠路へ爲御見廻御使書一段忝候、馳而快氣候而、頃別而息災候つる、可御心安候、猶追而自是可申入候條、不能詳候、恐々、

九月二日

秋月殿

「義久公御譜年號不知中ニアリ、案文有之トアリ」

1064 其後者不申通候、仍先日者願成寺へ貴老より被仰達符共給候、誠々御眞實御禮難申盡候、猶以符之儀爲可申、只今願成寺へ以使者申候、弥御入魂所仰候、將又其表相替儀無之候哉、珍敷儀共候（ハ、）可示給候、

九月十二日

相良左兵衛尉殿

「義久公御譜年號不知中ニ在リ」

「御文庫廿二番箱十卷中」

琉球三司官へ

老中

以先年一輪日州商人之儀雖申渡候、于今無一途、剩屬地下人之品滞在候歟、殊更彼等依才覺到日向、數年御膠染之儀顯然候、慮外不及是非候、僮者被任其筋、自今已後者對當邦辨之儀可被作事肝要候、若商等於無信用者、致承引者不

此等故兩國可爲阻隔之基候哉事候、期後音之時候、恐、

「義久公御譜年號不知中案文有之トアリ、琉球三司官へ老中ト朱カキアリ」

告諭大明各處、船主及諸商客等、近年貨船凌鯨海之波濤、不遠千里而來吾國之澳港、其勞苦之條難以口陳中間、諸有司務貪自利、不行公正、致令經紀、失利商估、無措近察知之情、寔可憫、今悉革除前弊、別約憲法數章、共宜遵守、此後若客船到岸之日可就本海濱之職人通報消息、即時選差清廉吏士、爲作主張、當國遞年或官買押買之類、嚴加禁止分毫不許妄取、但訂銀抽分之事、可准先例、子

細詳干後切莫違背、裝戴寶貨價直高低、日本之商人與大明之客衆共相參議、兩願和同、方可通利、從 主君若要用之物件亦如所定之錢兩收買不敢私作聰明焉、如此庶諸國交易之道、時々得通而吾邦柔遠之政處々流行可也、恐後無憑故、立官文付、與大明等處船主及諸商旅等、執照者如件、

唐船着津之時所定法度之條目、今錄干后、

一 賣買價直高低之事、汝唐人與日本商衆、以相論可相定之事、

一 到來之貨物、號官買自恣買取之輩者、令停止畢、自然

從 主君要買之時者、與商買人銀兩可爲同前之事、

一 訂頭銀事、如往古不可有斷絕、但銀一千兩之貨物者、

五十兩可准之事、

一 商賣物抽分之事、銀一千兩之賣買者、貳十兩可納之事、

一 別爲新法少不可有之事、

「義久公御譜年號不知冊中正文有之トアリ」

1067 「御文庫二拾一番箱十卷中」

御入洛之御祝言、最前可申上候處、分國中之鋒楯任無休期、令遲々背本意候、聊不存疎意趣、寄々御取合可畏入候、仍御太刀一腰・馬一疋、進覽之候、表祝儀候、猶喜入攝津介可申候、可得御意候、恐惶謹言、

「月日宛ナシ」

候、被進候、巨細此方立柄等彼使可申達候、

「上カキ」首頭殿 櫻井紹白判  
「御書添狀」 經定

1068 厥后無音罷過候條令啓達候、仍長々在陳御苦惱之段、且夕奉察計候、殊重疊候之御利運旁御名譽難申謝候、弥東國不殘可屬御手裏事、日出度令存候、次帷二進覽候、聊表嘉瑞而已候、恐々謹言、

「月日宛書ナシ」

1069 「義久公御譜中」

「案文在本田助之丞」

依遼遠未被申通候、去夏之比、最上宗檜被差下候、其以後無音之條被用使書候、宜預御取合候、仍而緞子雖些少

文  
書  
目  
録

## 例言

- 一 この目録は、本巻に収められた文書・記録・記事の全部を、底本の配列に従い、通し番号を付して収録したものである。
- 一 文書は、番号のほか、年月日、文書題を記載し、記録・記事は、年月日の欄に（記録又は記事）と記し、題を付した。
- 一 底本にある補筆の年紀には「」を付し、編者の註には（）を付した。
- 一 月の異称は数字に改めたが正月、朔日、晦日などはそのまま残した。

番号	年	月	日	文書題
卷一				
一		四月	十九日	沢某寛書条書
二		四月	十九日	土持撰津入道雲也書狀
三		七月	廿五日	本田重經書狀
四		十月	廿九日	盛朗書狀
五				島津氏重書注文
六				島津氏重書注文
七				相馬胤綱一流系図
八				(記事)
九				四条東洞院敷地相伝系図
一〇		正月	十七日	島津国久書狀
一一		九月	二日	近衛前久書狀
一二		九月	廿六日	近衛信尹書狀
一三		十二月	十三日	近衛信尹書狀
一四		四月	十六日	進藤長治書狀
一五		四月	十日	進藤長治書狀
一六		六月	廿八日	進藤長治書狀
一七		三月	五日	進藤長治書狀
一八		三月	十七日	進藤長治書狀
一九		三月	九日	進藤長治書狀
二〇		九月	五日	進藤長治書狀
		九月	廿六日	進藤長治書狀

番号	年	月	日	文書題
二一		十二月	十三日	進藤長治書狀
二二		四月	二日	進藤長治書狀
二三		四月	五日	進藤長治書狀
二四		三月	十三日	進藤光盛書狀
二五		三月	九日	進藤光盛書狀
二六		三月	十五日	不断光院清誓書狀
二七		三月	十日	不断光院清誓書狀
二八		三月	十七日	不断光院清誓書狀
二九		三月	十五日	飛鳥井雅教書狀
三〇		九月	十一日	飛鳥井雅教書狀
三一		三月	十六日	四辻季遠書狀
三二		十一月	廿六日	近衛信尹書狀
三三		十月	二日	本多正純書狀
三四		十月	廿二日	飛鳥井雅庸蹴鞠伝授狀
三五		八月	十六日	近衛植家書狀
三六		八月	十六日	近衛植家書狀
三七		八月	十七日	松尾頼元書狀
三八		八月	十八日	日野町資将書狀
三九		八月	十八日	日野町資将書狀
四〇		三月	廿八日	尊朝法親王書狀
四一		正月	廿三日	角田広繼書狀

四二	二月廿三日	新納忠元書狀	六五	九月十七日	新納忠元書狀
四三	十月 四日	未弘入道鈎江書狀	六六	九月廿四日	川上忠智書狀
四四	六月廿五日	長積書狀	六七	九月廿四日	不断光院清養書狀
四五		某書狀	六八	六月十六日	細川忠時書狀
四六	六月 八日	島津義虎書狀	六九	六月十三日	島津久元書狀
四七		本田親歲書狀	七〇	六月 六日	鎌田某・有馬某連署書狀
四八	七月廿八日	鑑法書狀	七一	四月 朔日	豐臣秀吉朱印狀
四九	正月十二日	津興書狀	七二	正月十四日	豐臣秀吉朱印狀
五〇		某條書	七三	十一月 六日	豐臣秀吉朱印狀
五一	十二月廿七日	島津義虎書狀	七四	十一月 六日	豐臣秀吉朱印狀
五二	十月廿四日	法印頼金書狀	七五	十一月 八日	豐臣秀吉朱印狀
五三	六月 五日	島津久元・山田有榮連署書狀	七六	十二月十八日	豐臣秀吉朱印狀
五四	六月廿四日	島津忠嘉書狀	七七	六月 九日	伊集院忠棟・村田經定連署書狀
五五	十二月十四日	安楽兼惟申狀	七八	九月廿五日	山田有榮書狀
五六		肝付兼統證狀	七九	八月 八日	本多正信書狀
五七	七月廿七日	山田有信書狀	八〇	三月十一日	伊勢貞成書狀
五八	二月 卅日	伊集院久治書狀	八一	二月十四日	伊勢貞成書狀
五九	三月 十日	安楽某申狀	八二	十二月廿三日	新納久元書狀
六〇	六月 一日	伊勢貞昌書狀	八三	三月廿七日	新納忠元書狀
六一	八月十五日	伊勢貞昌書狀	八四	六月 八日	新納忠元書狀
六二	九月 二日	伊勢貞昌書狀	八五	七月 五日	新納忠元書狀
六三	九月廿三日	伊勢貞昌書狀	八六	十一月廿四日	新納忠元書狀
六四	十一月廿三日	北郷時久書狀	八七	五月廿五日	新納忠元書狀

八八 六月 廿日 新納忠元書狀  
 八九 八月 五日 新納忠元書狀  
 九〇 十二月 三日 新納忠元書狀  
 九一 四月 廿六日 新納忠元書狀  
 九二 二月 十三日 新納忠元書狀  
 九三 二月 廿三日 新納忠元書狀  
 九四 四月 廿四日 新納忠元書狀  
 九五 十月 三日 木原徳斎書狀  
 九六 八月 廿七日 三原重庸書狀  
 九七 九月 十三日 近衛信尹書狀  
 九八 七月 六日 賦所達書  
 九九 四月 廿四日 本多正信書狀  
 一〇〇 十二月 廿二日 伊集院忠棟書狀  
 一〇一 六月 十一日 長寿書狀  
 一〇二 六月 十六日 青巖寺法印政遍書狀  
 一〇三 七月 廿九日 某書狀  
 一〇四 十一月 六日 町田久倍書狀  
 一〇五 二月 廿六日 町田久倍書狀  
 一〇六 五月 十八日 本田親貞書狀  
 一〇七 正月 晦日 町田久倍書狀  
 一〇八 四月 十一日 町田久政書狀  
 一〇九 正月 廿四日 進藤久治書狀  
 一一〇 六月 十三日 喜入忠統・川上久国連署書狀

卷二

一一一 六月 六日 川上某・伊地知重起連署書狀  
 一一二 六月 廿三日 伊勢貞知書狀  
 一一三 十一月 十一日 伊勢貞知書狀  
 一一四 七月 十八日 本田正親書狀  
 一一五 五月 八日 海老原為信書狀  
 一一六 二月 九日 比志島国幸書狀  
 一一七 五月 十六日 五代友喜書狀  
 一一八 四月 十日 比志島国貞・伊勢貞昌連署書狀  
 一一九 三月 四日 平田増宗書狀  
 一二〇 三月 廿八日 鎌田政近・比志島国貞連署書狀  
 一二一 四月 廿四日 鹿屋某申狀  
 一二二 七月 十日 島津家久旋書  
 一二三 五月 廿二日 原田某申狀  
 一二四 (慶長 六年) 十一月 十一日 伊勢貞成達書  
 一二五 正月 十二日 有馬純房書狀  
 一二六 七月 廿三日 有馬純房書狀  
 一二七 七月 廿一日 新納忠元書狀  
 一二八 五月 十日 村田経安・平田兼宗連署書狀  
 一二九 〔文明 中〕 十一月 廿二日 村田経安書狀  
 一三〇 二月 八日 伊集院忠棟外二名連署書狀  
 一三一 九月 十八日 平田宗親・喜入久正連署書狀  
 一三二 落合兼朝覺書

一三三	二月 二日	伊集院忠棟外二名連署書狀	一五六	九月十四日	仁礼頼景書狀
一三四	二月廿九日	片山重次書狀	一五七	九月十八日	仁礼頼景書狀
一三五	九月廿三日	進藤長治書狀	一五八	七月十二日	川上忠豊書狀
一三六	十二月 七日	新納忠元書狀	一五九	七月十七日	川上忠豊書狀
一三七	正月 元日	樺山久高書狀	一六〇	三月 三日	島津忠廣書狀
一三八	八月十一日	島津久元外二名連署書狀	一六一	八月 三日	川上某書狀
一三九	十月十七日	新納忠元書狀	一六二	三月 三日	川上久因書狀
一四〇	九月 十日	忍性入道江範書狀	一六三	四月廿六日	川上久因書狀
一四一	四月廿六日	伊集院久治書狀	一六四	七月廿九日	喜入忠統書狀
一四二	三月廿三日	上井秀秋書狀	一六五	六月 九日	喜入忠統書狀
一四三	七月十七日	上井秀秋書狀	一六六	十一月廿日	島津久慶書狀
一四四	八月十二日	上井秀秋書狀	一六七	正月 九日	島津久慶書狀
一四五	九月 廿日	伊集院是心書狀	一六八	二月 三日	島津久慶書狀
一四六	二月廿九日	滝聞宗運書狀	一六九	二月十五日	川上久因書狀
一四七	十月十九日	滝聞宗運書狀	一七〇	八月廿一日	新納忠清外二名連署書狀
一四八	四月十五日	市来家親書狀	一七一	四月十九日	川口重昌書狀
一四九	七月 廿日	上床国寄書狀	一七二	正月十四日	頼姪久政・新納忠清書狀
一五〇	二月廿七日	伊集院久治書狀	一七三	九月廿六日	東郷重盛・川上忠位署書狀
一五一	五月十七日	伊勢貞真書狀	一七四	八月 二日	島津久慶・島津久元連署書狀
一五二	六月 廿日	伊勢貞昭書狀	一七五	八月 二日	島津久元書狀
一五三	八月廿三日	諏訪兼延書狀	一七六	二月廿八日	川上久因書狀
一五四	八月十二日	川上久隅書狀	一七七	二月十二日	川上久因書狀
一五五	七月廿五日	川上久隅書狀	一七八	十月十五日	川上久因外三名連署書狀

(天正十六年)

一七九	三月十八日	川上忠智・新納長住連署書狀	二〇二	閏七月廿八日	島津久慶・川上久國連署書狀
一八〇	十月 朔日	島津久慶書狀	二〇三	二月十四日	島津久慶・島津久元連署書狀
一八一	三月廿八日	新納忠清外二名連署書狀	二〇四	六月十二日	島津久元外二名連署書狀
一八二	八月十七日	某書狀	二〇五	七月十二日	島津久元書狀
一八三	十月十五日	新納長住書狀	二〇六	十月廿三日	伊勢貞昌書狀
一八四	七月廿三日	新納忠清・高橋能乘連署書狀	二〇七	八月十五日	八重尾久重書狀
一八五	十一月廿一日	島津久薰書狀	二〇八	三月十五日	八重尾某書狀
一八六	二月 三日	島津久薰書狀	二〇九	八月十五日	八重尾某祈願神事次第注進狀
一八七	正月十一日	島津久慶外二名連署書狀	二一〇	(記錄)	御記錄所帳留
一八八	八月十三日	五代友泰書狀	二一一	留守家由緒書	
一八九	八月 晦日	喜入忠統書狀	二一二	元祿元年 十一月 晦日	寺社奉行所違書
一九〇	五月廿六日	山田有榮書狀	二一三	七月廿八日	記錄所請取狀
一九一	三月十四日	山田有榮書狀	卷三		
一九二	閏五月 二日	島津久通・山田有榮連署書狀	二一四	二月廿四日	某書狀
一九三	閏七月十二日	鎌田政統書狀	二一五	四月 七日	町田家久 <small>清忠</small> 書狀
一九四	十月十五日	島津久元外二名連署書狀	二一六	八月 五日	涉川道鎮 <small>顯</small> 書狀
一九五	九月 廿日	川上久國書狀	二一七	二月十七日	明真書狀
一九六	七月 二日	喜入忠統書狀	二一八		某書狀
一九七	閏七月 七日	高崎能乘書狀	二一九		某書狀
一九八	正月廿八日	山田有榮書狀	二二〇	四月 九日	島津実久書狀
一九九	九月廿七日	島津久茂外二名連署書狀	二二一	七月廿八日	島津実久書狀
二〇〇	五月 廿日	伊地知重時書狀	二二二	正月十一日	島津忠興書狀
二〇一	正月 七日	新納某書狀	二二三	四月十六日	北郷久加外二名連署廻文

二二四	三月十八日	堀某口達覚	二四七	五月廿八日	伊集院忠朗書狀
二二五	十月十六日	島津久馮書狀	二四八	十月十六日	頼忠法印書狀
二二六	十月 六日	伊地知重行・有川貞政連署書狀	二四九	二月 十日	島津久逸書狀
二二七	閏六月十七日	細川高国書狀	二五〇	潤正月廿一日	島津運久書狀
二二八	十月十六日	新納忠清書狀	二五一	十一月廿三日	島津忠廉書狀
二二九	六月十三日	酒勾伊景書狀	二五二	五月十一日	別府某書狀
二三〇	八月 九日	酒勾伊景書狀	二五三	六月 廿日	琉球国中山王書狀
二三一	四月 五日	入来院定 <sub>重</sub> 重書狀	二五四	六月 廿日	琉球国三司官書狀
二三二	三月十三日	大内義興書狀	二五五	六月十一日	某書狀
二三三	九月 三日	大内義興書狀	二五六		正八幡宮宝殿鎮壇祭次第覚書
二三四	正月十一日	大内義興書狀	二五七	承應 二年十二月 吉日	喜入久供寄進狀
二三五	七月十八日	相良為統書狀	二五八	寛文 二年 六月十三日	市来家賀寄進狀
二三六	十月 朔日	石田三成書狀	二五九	二月 三日	森澄秀書狀
二三七	十一月廿六日	近衛尚通書狀	二六〇	十二月十二日	祐身書狀
二三八	四月廿二日	伊集院忠朗書狀	二六一	三月十六日	宗安書狀
二三九	(記事)	鮫島氏古系図	二六二	十月廿九日	盛朗書狀
二四〇	五月 三日	某書狀	二六三	十一月 八日	伊地知重房書狀
二四一	六月廿六日	本田親貞書狀	二六四	正月十一日	伊集院忠棟書狀
二四二	二月廿三日	入来院重豊契狀	二六五	正月 元日	樺山久高書狀
二四三	閏六月 八日	本田宗親書狀	二六六	八月 十日	左衛門尉時性書狀
二四四	四月十五日	明見書狀	二六七	三月 八日	龜山上皇院宣
二四五	八月 七日	北郷知久書狀	二六八	六月廿六日	龜山上皇院宣
二四六	八月十九日	北郷知久書狀	二六九	六月 五日	石清水八幡宮別当家奉書

二七〇	二月 十日	石清水八幡宮別当家奉書	二九三	十一月十一日	伊勢貞成達書
二七一	八月 五日	新田宮法印某申狀	二九四	七月廿八日	樺山久高覽書
二七二	(正中二年)十一月十八日	宇佐宮宗寬書狀	二九五	十月廿六日	贈品目錄
二七三	八月廿六日	某書狀	二九六	九月廿七日	島津久元書狀
二七四	二月廿七日	新納久了覽書	二九七	三月廿五日	島津久慶外三名連署書狀
二七五	九月十一日	石田三成書狀	二九八		島津義久宛行狀
二七六	五月十二日	近衛信尋書狀	二九九	三月十四日	彦山福寿坊堯秀外三名書狀
二七七	八月 五日	甲斐重政書狀	三〇〇	七月十七日	島津義久直書
二七八	十一月廿六日	近衛信尹書狀	三〇一	正月 九日	川上久國書狀
二七九	十一月廿六日	近衛信尹書狀	三〇二		渋谷氏鹿尾鳥參仕座配書立
二八〇	四月廿七日	近衛尚通書狀	三〇三	十二月十三日	伊地知重貞・本田兼親連署書狀
二八一	四月廿七日	進藤長英書狀	三〇四	四月 五日	村田經安書狀
二八二	四月廿七日	近衛尚通書狀	三〇五	十二月 七日	喜入忠蒼書狀
二八三	四月廿七日	近衛尚通書狀	三〇六	五月十四日	伊東祐商書狀
二八四	四月廿七日	進藤長英書狀	三〇七	二月十六日	新納忠勝書狀
二八五	四月廿七日	近衛植家書狀	三〇八	十一月廿三日	新納忠勝書狀
二八六		正八幡宮宝殿鎮壇祭次第覽書	三〇九	八月廿四日	島津忠朝書狀
二八七		川上久慶書付	三一〇	十一月 吉日	彦山政所坊信梁書狀
二八八	二月 三日	森澄秀書狀	三一〇	十月 卅日	島津忠朝書狀
二八九	十二月十二日	祐身書狀	三一〇	十月 卅日	島津忠朝書狀
二九〇	三月十六日	宗安書狀	三一三	十月 廿日	島津忠広書狀
二九一	正月十二日	有馬純房書狀	三一三	二月十四日	相良義滋書狀
二九二		島津家久詠草	三一四		新納忠勝進上品注文
			三一五		新納忠勝進上品注文

三二六	九月 二日	進藤長英書狀	三三八	五月 四日	隈江匡久書狀
三一七	九月 四日	島津忠朝書狀	三三九	五月廿三日	隈江匡久書狀
三一八	十一月廿六日	近衛信尹書狀	三四〇	六月十一日	隈江匡久書狀
三一九	十一月廿六日	近衛尚通書狀	三四一	七月 十日	隈江匡久書狀
三二〇	十一月廿六日	近衛信尹書狀	三四二	七月 卅日	隈江匡久書狀
三二一	八月十二日	川上忠智書狀	三四三	八月廿八日	隈江匡久書狀
三二二	八月廿五日	新納忠元書狀	三四四	九月 七日	隈江匡久書狀
三二三	十二月廿四日	新納忠元書狀	三四五	三月十八日	島津道憲 <small>伊作</small> 書狀
三二四	八月 晦日	新納忠元書狀	三四六	四月 四日	島津道憲 <small>宗久</small> 書狀
三二五	十一月廿六日	新納忠元書狀	三四七	十月廿三日	東郷重位書狀
三二六	二月 七日	三獻式次第覺書	三四八	七月 三日	某申狀
三二七	十月 十日	梅北國兼書狀	三四九	六月十七日	児玉利昌書狀
三二八	十一月十三日	某書狀	三五〇	十一月廿六日	近衛尚通書狀
三二九	二月廿三日	新納久利書狀	三五一	十一月廿六日	諏訪某起請文前書
三三〇	五月十六日	隈江匡久書狀	三五二	二月廿九日	伊勢貞知書狀
三三一	六月十七日	隈江匡久書狀	三五三	九月廿八日	有馬晴信書狀
三三二	六月廿八日	隈江匡久書狀	三五四	九月廿六日	某覺書
三三三	六月十三日	隈江匡久書狀	三五五	九月十三日	近衛前久書狀
三三四	七月 十日	隈江匡久書狀	三五六	九月 五日	畠山直顯書下
三三五	十一月廿一日	隈江匡久書狀	三五七	六月 五日	入来院重門書狀
三三六	三月十一日	隈江匡久・中野歳信連署書狀	三五八	八月十二日	今川了俊 <small>世貞</small> 書狀
三三七	四月廿八日	隈江匡久書狀	三五九	八月十日	今川了俊 <small>世貞</small> 書狀
			三六〇		

三六一	正月 六日	今川了俊 <small>貞世</small> 書狀	三八四	二月 二日	伊勢貞昌書狀
三六二	五月十五日	今川了俊 <small>貞世</small> 書狀	三八五	九月廿七日	島津久元・伊勢貞昌連署書狀
三六三	六月 五日	今川了俊 <small>貞世</small> 書狀	三八六	九月廿七日	島津久元書狀
三六四	六月 十日	今川了俊 <small>貞世</small> 書狀	三八七	十一月廿八日	本田親存書狀
三六五	正月廿八日	今川了俊 <small>貞世</small> 書狀	三八八	二月 十日	鎌田政統等連署書狀
三六六	六月十三日	酒勾伊景書狀	三八九	四月 七日	新納久饒書狀
三六七	四月十五日	伊勢貞豐書狀	三九〇	三月 六日	町田久幸書狀
三六八	四月廿一日	渋谷重村着到狀	三九一	六月廿四日	喜入忠統外四名連署書狀
三六九	六月十九日	島津常久書狀	三九二	四月廿七日	喜入忠統・比志島國隆連署書狀
三七〇	五月廿七日	入来院重高書狀	三九三	七月 朔日	島津久元外二名連署書狀
三七一	閏七月十六日	入来院重朝書狀	三九四	三月 七日	本田親存書狀
三七二	十二月 二日	入来院重次書狀	三九五	四月十八日	島津久元・三原重種連署書狀
三七三	四月十三日	入来院重次書狀	三九六	二月十六日	喜入忠統・川上久國連署書狀
三七四	十一月十八日	入来院重高書狀	三九七	四月廿九日	伊勢貞昌書狀
三七五	九月 十日	入来院重頼書狀	三九八	八月十二日	山田有榮・市來家繁連署書狀
三七六	十一月 十日	出水公方向用途支配注文	三九九	三月 六日	本田親商書狀
三七七	五月 五日	入来院重高書狀	四〇〇	四月廿二日	島津久元・伊勢貞昌連署書狀
三七八		吉枝名実検帳	四〇一	二月十二日	伊勢貞昌書狀
三七九		(記事)	四〇二	六月十二日	伊勢貞昌書狀
三八〇	十一月十五日	入来院重時書狀	四〇三	五月廿五日	伊勢貞昌書狀
三八一		(記事)	四〇四	十一月廿三日	伊勢貞昌書狀
三八二		入来院重時宛行狀	四〇五	十月 五日	伊勢貞昌書狀
三八三	十二月十五日	伊勢貞陸書狀			

四〇六	十一月廿七日	伊勢貞昌書狀	四二八	七月 四日	從儀師幸雅施行狀
四〇七	十二月十四日	伊勢貞昌書狀	四二九	三月十八日	長倉祐省外三名連署書狀
四〇八	正月 十日	伊勢貞昌書狀	四三〇		某書狀
四〇九	四月十一日	伊勢貞昌書狀	四三一	五月 十日	村田經安・平田兼宗連署書狀
四一〇	八月十四日	伊勢貞昌書狀	四三二	(記事)	肝付氏弁濟使職系圖
四一一	九月十二日	伊勢貞昌書狀	四三三	九月 八日	正賢奉書
四一二	十一月十六日	伊勢貞昌書狀	四三四		某下文
四一三	二月廿九日	伊勢貞昌書狀	四三五	正月廿一日	行惠書狀
四一四	十二月廿六日	伊勢貞昌書狀	四三六	四月十二日	行惠書狀
四一五	五月廿三日	伊勢貞昌書狀	四三七	十一月 六日	榮寂書狀
四一六	二月 二日	伊勢貞昌書狀	四三八	十月廿四日	行惠書狀
四一七	七月十六日	島津久慶・川上久國連署達書	四三九	六月十二日	為成書狀
四一八	七月廿七日	伊勢貞昌書狀	四四〇		某書狀追而書
四一九	六月 廿日	伊勢貞昌書狀	四四一		某書狀追而書
四二〇	六月十二日	伊勢貞昌書狀	四四二	八月 九日	名和慈冬書狀
四二一	五月廿五日	伊勢貞昌書狀	四四三	八月 十日	今川了俊 <small>貞</small> 書狀
四二二	四月十六日	島津久慶・額姪久政連署廻文	四四四	八月 十日	今川了俊 <small>貞</small> 書狀
四二三	四月十六日	北郷久加外二名連署廻文	四四五	八月 十日	今川了俊 <small>貞</small> 書狀
			四四六	二月 七日	今川三雄書狀
卷六			四四七	二月十一日	今川三雄書狀
四二四	七月廿七日	北条泰時書狀	四四八	四月廿一日	今川三雄書狀
四二五	(記事)	額姪忠永一流系圖	四四九	正月 六日	今川了俊 <small>貞</small> 書狀
四二六	二月 五日	某書狀	四五〇	二月廿三日	今川了俊 <small>貞</small> 書狀
四二七	八月 七日	島津常陸証狀			

四五二	三月廿一日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四七三	閏八月	島津重豪達書
四五三	三月廿一日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四七四	六月	島津重豪達書
四五四	四月廿一日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四七五	十二月	島津市正某達書
四五五	四月 廿日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四七六	九月	島津重豪達書
四五六	四月十三日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四七七	十二月	島津齊宣達書
四五七	四月十三日	今川貞臣書狀	四七八		島津齊宣遺物注文
四五八	七月 五日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四七九		遺物注文
四五九	九月 四日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四八〇	十一月	穎娃信濃 <sup>久</sup> 達書
四六〇	九月十六日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四八一	七月	市田某達書
四六一	九月廿四日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四八二	六月廿六日	北郷某書狀
四六二	十月十九日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四八三	八月 三日	北郷某・土持某連署覚書
四六三	八月 四日	酒勾伊景書狀	四八四	九月十四日	新納忠元書狀
四六四	八月 四日	市來家親書狀	四八五	十一月 十日	島津忠隣書狀
四六五	正月廿五日	直忠書狀	四八六	五月 二日	比志島國貞書狀
四六六	十月廿九日	今川了俊 <sup>世貞</sup> 書狀	四八七	九月十四日	畠山政長書狀
四六七	五月廿三日	宮内大輔守政書狀	四八八	九月十三日	道澄書狀
四六八	正月十一日	入来院氏給地反町付帳	四八九	九月 三日	近衛前久書狀
四六九	十二月廿七日	川上忠兄書狀	四九〇	九月廿八日	近衛信尹書狀
四七〇	十月 朔日	石田三成書狀	四九一	三月 五日	近衛植家書狀
四七一	正月廿八日	入来院重時宛行狀案	四九二	四月 六日	近衛植家書狀
四七二	十月十四日	桂忠桎書狀	四九三	七月 四日	足利義昭御内書
		本田正親書狀	四九四	十一月 晦日	足利義昭御内書
			四九五	七月 八日	赤松政則書狀

四九六 宝徳 四年 十月 七日 島津氏重書注文  
 四九七 島津氏重書注文  
 四九八 (記事) 相馬胤綱一流系図  
 四九九 (記事) 四条東洞院敷地相伝系図  
 五〇〇 元禄十四年 三月 林信篤跋  
 五〇一 五月 九日 北条義時書状  
 五〇二 (元弘 三年) 八月 四日 後醍醐天皇綸旨  
 五〇三 三月 廿九日 北条貞時書状  
 五〇四 四月 廿九日 足利高氏書状  
 五〇五 六月 十日 足利高氏書状  
 五〇六 八月 二日 足利尊氏書状  
 五〇七 二月 廿八日 足利義滿御内書  
 五〇八 九月 二日 足利義滿御内書  
 五〇九 八月 十日 今川了俊書状  
 五一〇 六月 廿六日 足利義植御内書  
 五一一 三月 八日 足利義教御内書  
 五一二 (永享 五年) 閏七月 十一日 足利義教御内書  
 五一三 九月 三十日 足利義教御内書  
 五一四 四月 十三日 足利義教御内書  
 五一五 六月 十七日 足利義教御内書  
 五一六 二月 廿二日 足利義政御内書  
 五一七 九月 廿三日 足利義政御内書  
 五一八 十二月 十五日 足利義政御内書

五一九 十二月 十五日 足利義政御内書  
 五二〇 七月 十七日 足利義政御内書  
 五二一 (永禄 三年) 六月 二日 足利義輝御内書  
 五二二 (永禄 三年) 六月 二日 近衛植家書状  
 五二三 (永禄十二年) 六月 十六日 足利義昭御内書  
 五二四 十月 廿八日 細川藤孝副状  
 五二五 十一月 二日 足利義昭御内書  
 五二六 [七]月 廿二日 細川藤孝副状  
 五二七 四月 十四日 足利義昭御内書  
 五二八 四月 十四日 一色藤長副状  
 五二九 四月 十七日 足利義昭御内書  
 五三〇 (天正五年九) 四月 十七日 真木島昭光・一色昭秀連署副状  
 五三一 (天正 六年) 九月 十一日 足利義昭御内書  
 五三二 (天正 六年) 九月 十一日 一色昭秀・真木島昭光連署副状  
 五三三 (天正八年) 八月 十二日 織田信長書状  
 五三四 (天正八年) 八月 十二日 織田信長書状  
 五三五 (天正八年) 九月 十九日 近衛前久書状  
 五三六 九月 四日 足利義昭御内書  
 五三七 (天正十二年) 九月 四日 足利義昭御内書  
 五三八 (天正十四年) 十二月 四日 足利義昭御内書  
 五三九 十二月 四日 足利義昭御内書  
 五四〇 十二月 四日 足利義昭御内書  
 五四一 二月 廿六日 足利義昭御内書

五四二	大番頭座廻文	三月廿五日	文化八年	五四二
五四三	大番頭廻文	三月		五四三
五四四	通達写	三月廿一日		五四四
五四五	通達写			五四五
五四六	通達写			五四六
五四七	通達写			五四七
五四八	島津貞久書状	十二月十八日	卷八	五四八
五四九	島津貞久書状	正月十一日		五四九
五五〇	島津師久書状	二月十九日		五五〇
五五一	入来院氏略系図	(記事)		五五一
五五二	足利義滿御内書	三月 六日		五五二
五五三	昌和書状	閏九月十二日		五五三
五五四	足利義滿御内書	十月 七日		五五四
五五五	少式冬資書状	六月十五日		五五五
五五六	少式貞頼書状	十二月廿五日		五五六
五五七	一色三雄卒状	十二月廿五日		五五七
五五八	島津守久書状	三月 六日		五五八
五五九	明真書状	二月十七日		五五九
五六〇	明真書状	二月 九日		五六〇
五六一	島津貞久書状	三月 八日		五六一
五六二	島津氏所領注文 某書状	八月		五六二
五六三	齋藤明真書状	二月 九日		五六三
五六四	某申状			五六四
五六五	島津貞久覚書			五六五
五六六	鎮西下知状			五六六
五六七	芥河愛阿書状	四月十五日		五六七
五六八	入来院重豊契約状	二月廿三日		五六八
五六九	大友親世書状	十二月十三日		五六九
五七〇	今川了俊書状	十二月 九日		五七〇
五七一	今川了俊書状	三月廿五日		五七一
五七二	今川了俊書状	八月廿九日		五七二
五七三	貞信書状	九月 三日		五七三
五七四	島津伊久書状	九月十六日		五七四
五七五	島津守久書状	二月廿 <sup>〇</sup> [五]日		五七五
五七六	島津氏久安堵状	七月十六日		五七六
五七七	島津氏久書状	七月 廿日		五七七
五七八	島津元久書状	十二月 二日		五七八
五七九	島津元久書状	四月 十日		五七九
五八〇	島津元久書状	二月十三日		五八〇
五八一	島津氏進上物注文	二月十一日		五八一
五八二	島津久豊書状	二月廿三日		五八二
五八三	島津久豊書状	四月廿一日		五八三
五八四	島津久豊書状	六月十五日		五八四
五八五	島津久豊書状			五八五

五八六	十一月廿六日	島津久豊書狀	六〇九	八月十七日	島津忠国書狀
五八七	十一月廿三日	島津久豊書狀	六一〇	八月十七日	島津忠国書狀
五八八	十一月廿六日	島津久豊書狀	六一一	六月 廿日	金九世主書狀
五八九	十一月廿三日	島津久豊書狀	六一二	四月十五日	赤松滿政書狀
五九〇	十月 六日	島津久豊書狀	六一三		室町將軍家御教書
五九一	十月十一日	島津久豊書狀	六一四		室町幕府奉行奉書
五九二	七月廿六日	島津久豊書狀	六一五	三月十八日	島津立久書狀
五九三	十一月廿二日	島津久豊起請文	六一六	十二月十九日	島津立久書狀
五九四	九月廿九日	島津久豊書狀	六一七	七月十七日	島津立久書狀
五九五	八月 五日	樺山教久 <small>久</small> 書狀	六一八	九月 九日	島津立久書狀
五九六	七月 九日	樺山滿久起請文	六一九		島津立久譜
五九七	五月十七日	島津久豊書狀	六二〇	三月十五日	島津立久書狀
五九八	九月廿五日	島津久豊書狀	六二一	十一月 二日	島津忠治書狀
五九九	十二月 七日	島津忠国書狀	六二二	十一月廿四日	島津忠治書狀
六〇〇	三月廿三日	島津忠国書狀	六二三	十一月 二日	島津忠治書狀
六〇一	二月 卅日	島津忠国書狀	六二四	十二月廿一日	島津忠治書狀
六〇二	正月 五日	島津忠国書狀	六二五	八月廿四日	島津忠治書狀
六〇三	正月 廿二日	細川頼春書狀	六二六	正月 廿日	島津忠治書狀
六〇四	十一月廿四日	島津忠国書狀	六二七	十一月 一日	島津勝久書狀
六〇五	正月十二日	島津忠国書狀	六二八	十月 三日	島津勝久書狀
六〇六	二月 三日	島津忠国書狀	六二九	六月 三日	島津勝久書狀
六〇七	五月 四日	島津忠国書狀	六三〇	六月 三日	島津勝久書狀
六〇八			六三一		渋谷氏鹿兒島參仕座配書立

〔應永十八、九頃〕

〔應永中頃〕

〔正平 六年〕

〔永正中〕

（記事）

六三二	十月十六日	島津勝久書狀	六五三	六月廿九日	島津忠繼書狀
六三三	六月廿八日	島津勝久書狀	六五四	六月十五日	少式冬資書狀
六三四	十月十一日	島津勝久書狀	六五五	八月廿九日	今川了俊 <small>世貞</small> 書狀写
六三五	七月 七日	肝付久兼 <small>兼演</small> 書狀	六五六	九月 三日	某書狀
六三六	某契約文案文		六五七	(至徳元年)閏九月十二日	某書狀
六三七	十二月 三日	島津勝久書狀	六五八	四月十四日	島津氏久書狀
六三八	十一月 二日	大内義興書狀	六五九	七月 七日	某書狀
六三九	八月廿二日	大内義興書狀	六六一	二月廿八日	足利義滿御内書
六四〇	七月廿八日	肝付兼演外六名連署覚書	六六二	正月十六日	島津氏久書狀
六四一	十月廿八日	親方書狀	六六三	九月廿四日	島津玄久 <small>久氏</small> 書狀
六四二	十月廿八日	某書狀	六六四	十二月廿五日	島津元久書狀
六四三	六月 朔日	島津勝久書狀	六六五	二月 九日	島津元久書狀
六四四	二月廿八日	島津勝久書狀	六六六	二月十三日	島津元久書狀
六四五	七月 二日	島津勝久書狀	六六七	四月十四日	島津元久書狀
六四六	八月十七日	島津勝久書狀	六六八	七月 一日	島津忠国書狀
六四七	九月十七日	島津勝久書狀	六六九	三月 八日	足利義教御内書
六四八	八月十三日	島津勝久書狀	六七〇	(永享五年)閏七月十一日	足利義教御内書
六四九	七月十五日	島津勝久書狀	六七一	九月 卅日	足利義教御内書
六五〇	四月十四日	島津勝久書狀	六七二	七月廿一日	島津立久書狀
六五一	九月 六日	島津勝久書狀	六七三	三月十四日	島津立久書狀
六五二	(記事)	島津忠宗譜	六七四	六月廿六日	足利義植御内書
			六七五	三月廿九日	本田国親書狀

卷九

六七六	四月 十日	島津忠国書状	六九九	十二月 二日	島津忠昌書状
六七七	五月 四日	島津忠国書状	七〇〇	七月十九日	島津忠昌書状
六七八	十月廿九日	島津忠国書状	七〇一	十月十三日	島津忠昌書状
六七九	十一月 十日	島津忠国書状	七〇二	十一月 二日	島津忠治書状
六八〇		島津忠国書状	七〇三	七月廿六日	島津忠昌書状
六八一		島津忠国書状	七〇四	七月 五日	島津忠昌書状
六八二		島津忠国書状	七〇五	七月廿六日	島津忠昌書状
六八三		御感綸旨所望輩交名	七〇六		島津忠昌書状
六八四	十一月廿三日	島津貞久書状	七〇七	九月廿七日	島津忠昌書状
六八五	十一月廿六日	島津貞久書状	七〇八	七月廿三日	某書状
六八六	八月十九日	今川了俊 <small>貞世</small> 書状	七〇九	八月十八日	宗祇書状
六八七	二月十一日	布施英基書状	七一〇	四月 十日	島津忠昌書状
六八八		島津武久 <small>忠昌</small> 書状案	七一一	五月 廿日	島津忠昌書状
六八九		北郷久剛譜	七一二	十一月 六日	島津忠治書状
六九〇	十一月廿五日	島津武久 <small>忠昌</small> 書状	七一三	三月廿四日	島津忠治書状
六九一	正月廿三日	島津忠昌書状	七一四	七月廿三日	島津忠治書状
六九二		島津忠昌書状	七一五	八月廿四日	島津忠治書状
六九三		島津忠昌書状	七一六	十一月 二日	島津忠治書状
六九四		島津忠昌書状	七一七	十一月 二日	島津忠治書状
六九五	九月 晦日	島津忠昌書状	七一八	十一月廿四日	島津忠治書状
六九六	十月廿二日	島津忠昌書状	七一九	十二月廿一日	島津忠治書状
六九七	九月廿九日	取竜書状	七二〇		北郷久隆譜
六九八	十二月 二日	島津忠昌書状	七二一	十月 廿日	島津忠治書状

- 七二二 島津忠良等詠草
- 七二三 日新様以来御当家繁栄之事
- 七二四 (記事) 日新記
- 七二五 (記事) 日新記
- 七二六 (記事) 日新記
- 七二七 (記事) 日新記
- 七二八 (記事) 日新記
- 七二九 (記事) 日新記
- 七三〇 (記事) 日新記
- 七三一 (記事) 日新記
- 七三二 (記事) 日新記
- 七三三 (記事) 日新記
- 七三四 (記事) 日新記
- 七三五 (記事) 日新記
- 七三六 (記事) 日新記
- 七三七 (記事) 日新記
- 七三八 (記事) 日新記
- 七三九 (記事) 日新記
- 七四〇 (記事) 文明記
- 七四一 (記事) 伊集院忠朗書状
- 七四二 「大永六年」 九月廿一日 島津勝久書状
- 七四三 「永祿八年」 三月五日 近衛植家書状
- 七四四 六月二日 応胤入道親王書状
- 七四五 四月七日 可水書状
- 七四六 (天文十五年) 正月七日 近衛植家書状
- 七四七 正月十六日 半松斎宗養書状
- 七四八 二月廿九日 近衛植家書状
- 七四九 八月廿九日 半松斎宗養書状
- 七五〇 (記事) 春成氏系図抄
- 七五一 (記事) 飛松氏系図抄
- 七五二 五月十三日 島津日新良良契状
- 七五三 「永祿中」 九月廿三日 進藤長治書状
- 七五四 三月十三日 近衛植家書状
- 七五五 二月十九日 近衛植家書状
- 七五六 九月三日 近衛植家書状
- 七五七 十一月廿八日 近衛尚通書状
- 七五八 (天文廿一年) 九月朔日 近衛植家書状
- 七五九 九月二日 応胤入道親王書状
- 七六〇 三月十五日 近衛植家書状
- 七六一 九月廿五日 肝付兼興書状
- 七六二 島津日新良良詠草
- 七六三 寄進地目錄
- 七六四 (記事) 寄進記事
- 七六五 (記事) 島津忠良譜
- 七六六 (記事) 日新記



八二二 島津忠良詠草  
 八二三 島津忠良詠草  
 八二四 島津忠良譜  
 八二五 琉球中山王書狀  
 八二六 (記事) 島津忠良譜  
 八二七 島津忠良詠草  
 八二八 島津忠良譜  
 八二九 (永祿 六年) 二月廿一日 飛鳥井頼孝蹴鞠伝授狀  
 八三〇 (永祿 三年) 六月 朔日 島津忠良書狀  
 八三一 八月 朔日 島津忠良書狀  
 八三二 八月 五日 島津忠良書狀  
 八三三 八月 廿八日 近衛尚通書狀  
 八三四 二月 廿日 島津日新忠良書狀  
 島津忠良書狀

八三五 「大水年間」 八月廿八日 近衛尚通書狀  
 八三六 九月廿五日 島津日新忠良書狀  
 八三七 十月十二日 島津日新忠良書狀  
 八三八 八月 十日 島津忠良書狀  
 八三九 十二月 四日 島津忠良書狀  
 八四〇 十二月廿五日 島津日新忠良書狀  
 八四一 五月廿三日 島津忠良書狀  
 八四二 十一月十六日 島津日新忠良書狀  
 八四三 十一月 廿日 島津日新忠良書狀  
 八四四 四月廿三日 島津日新忠良書狀  
 八四五 七月 四日 島津日新忠良書狀  
 八四六 六月 一日 島津日新忠良書狀  
 八四七 三月十三日 島津忠良書狀  
 八四八 六月廿八日 進藤長治書狀  
 八四九 七月廿三日 朝倉義景書狀  
 八五〇 三月 三日 琉球国書狀  
 八五一 九月十一日 某綸旨副狀  
 八五二 「永祿ノ初」 五月 朔日 島津忠良書狀  
 八五三 八月 七日 島津忠良書狀  
 八五四 九月 一日 島津忠良書狀  
 八五五 十二月十五日 島津忠良書狀  
 八五六 五月廿七日 島津忠良書狀  
 八五七 島津忠良書狀

八五八 十二月廿四日 島津貴久書狀  
 八五九 閏六月十五日 島津貴久書狀  
 八六〇 島津貴久書狀  
 八六一 二月廿八日 島津貴久書狀  
 八六二 七月十九日 島津貴久書狀  
 八六三 三月十四日 島津貴久書狀  
 八六四 三月三日 島津貴久書狀  
 八六五 五月二日 島津貴久書狀  
 八六六 八月十一日 島津貴久書狀  
 八六七 島津貴久書狀  
 八六八 六月廿三日 島津貴久書狀  
 八六九 二月十一日 島津貴久書狀  
 八七〇 六月 朔日 某書狀  
 八七一 十一月五日 今岡通詮書狀  
 八七二 二月 廿日 島津忠良書狀  
 八七三 三月 廿日 龍造寺家門書狀  
 八七四 六月 二日 近衛種家書狀  
 八七五 (永祿 六年)十一月一日 島津貴久書狀  
 八七六 島津貴久書狀  
 卷十一  
 八七七 四月十一日 徳川家康起請文  
 八七八 某書狀  
 八七九 島津龍伯義久詠草

八八〇 島津義久詠草  
 八八一 島津義久詠草  
 八八二 島津義久詠草  
 八八三 島津義久詠草  
 八八四 島津義久詠草  
 八八五 島津義久詠草  
 八八六 島津義久詠草  
 八八七 島津義久詠草  
 八八八 島津義久詠草  
 八八九 島津義久詠草  
 八九〇 七月十六日 島津義久書狀  
 八九一 (天正 六年)十二月十日 島津義久書狀  
 八九二 島津義久書狀  
 八九三 三月 四日 島津義久書狀  
 八九四 二月廿五日 島津義久書狀  
 八九五 八月 四日 島津義久書狀  
 八九六 島津義久書狀  
 八九七 廿九日 島津義久書狀  
 八九八 十一月十二日 島津義久書狀  
 八九九 正月 廿日 島津義久書狀  
 九〇〇 二月 八日 島津義久書狀  
 九〇一 三月廿九日 島津義久書狀  
 九〇二 十二月十三日 島津義久書狀

九〇三		正月十一日	島津義久書狀	九二六	(永祿八年)	正月十四日	島津義久書狀
九〇四		四月十三日	島津義久書狀	九二七		五月十一日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九〇五		四月十五日	島津義久書狀	九二八	(文祿元年)	七月廿三日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九〇六	(記錄)		島津義久日記	九二九			某起請文
九〇七	〔慶長三年〕	八月十九日	大藏卿法印宗久副狀	九三〇	(文祿四年)		島津龍伯 <small>義久</small> 請書案
九〇八		十二月廿三日	尊朝法親王書狀	九三一		八月廿九日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九〇九		五月廿一日	近衛前久書狀	九三二		正月三日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九一〇		十月四日	近衛前久書狀	九三三		正月六日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九一一		九月廿三日	近衛信尹書狀	九三四		六月二日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九一二		十月廿八日	近衛前久書狀	九三五		四月五日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九一三		十一月廿七日	德川家康書狀	九三六			島津義久掟書
九一四		二月十日	近衛前久書狀	九三七		五月十日	某覚書
九一五		七月四日	近衛信尹書狀	九三八			某覚書
九一六		九月廿一日	近衛前久書狀	九三九		三月十八日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九一七		四月廿五日	近衛前久書狀	九四〇		七月廿日	島津義久書狀
九一八		四月廿五日	近衛龍山 <small>前久</small> 書狀追而書	九四一		三月廿五日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九一九			近衛龍山 <small>前久</small> 返事事書	九四二		正月廿三日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九二〇			近衛前久伝語書	九四三		正月十一日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九二一			近衛前久書狀追而書	九四四		正月七日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九二二	(元龜元年)	八月十日	近衛前久書狀	九四五	〔慶長中〕	〇九月十六日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九二三		三月二日	近衛前久書狀	九四六		六月十一日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九二四	(天正十年)	六月十七日	近衛前久書狀	九四七		二月廿二日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九二五		三月十四日	足利義昭御内書	九四八		五月廿四日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀

九四九	正月 九日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀	九七一	三月廿六日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀案
九五〇	正月十五日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀	九七二	四月 三日	昭高院道澄書狀
九五一	十一月十二日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀	九七三	四月十二日	某書狀案
九五二	七月 十日	城親賢書狀	九七四	四月十七日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九五三	四月 六日	舜有書狀	九七五	五月十八日	島津家久書狀
九五四	十二月十三日	名和頭孝書狀	九七六	八月廿七日	某書狀
九五五	十月 七日	近衛信尹書狀	九七七	九月廿五日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九五六	十二月十三日	大友宗麟 <small>義經</small> 書狀	九七八	八月 一日	賴惠書狀
九五七	二月廿二日	志岐麟泉 <small>義經</small> 書狀	九七九	九月廿三日	進藤長治書狀
九五八	二月 八日	相良頼房 <small>義陽</small> 書狀	九八〇	十月廿一日	佐々木宗綱書狀
九五九	八月十二日	土持麟松書狀	九八一	十月 二日	島津義久書狀案
九六〇	九月十一日	相良頼房 <small>義陽</small> 書狀	九八二	十月廿一日	佐々木宗綱書狀
九六一	正月十六日	長岡兵部・石田三成連署書狀	九八三	十一月廿一日	佐々木宗綱書狀
九六二	四月 三日	星野鎮胤書狀	九八四	九月 五日	伊集院忠金書狀
九六三	二月十五日	石田正澄書狀	九八五	十月廿六日	島津義久書狀案
九六四	六月廿八日	山口玄蕃頭書狀	九八六	十一月廿六日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
卷十二					
九六五	二月十八日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀	九八七	十二月廿六日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀
九六六		島津義久 <small>覺書</small>	九八八		義性書狀
九六七	三月廿一日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀案	九八九		那覇里主等連署書狀
九六八	三月十三日	島津義久書狀案	九九〇		島津義久書狀案
九六九	三月十三日	島津義久書狀案	九九一		島津義久書狀案
九七〇	二月 三日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀	九九二		島津義久書狀案
			九九三		鷹狩供衆注文

九九四	三月廿六日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀	一〇一七	四月廿八日	明宗書狀
九九五	十一月二日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀案	一〇一八	五月 吉日	元昌書狀
九九六	四月十七日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀	一〇一九	八月 吉日	鞍馬寺妙法院盛雅書狀
九九七	二月廿九日	島津龍伯 <small>義久</small> 書狀	一〇二〇	八月 三日	鞍馬寺妙法坊客全書狀
九九八	正月十九日	島津義久書狀案	一〇二一	九月 吉日	連長書狀
九九九	正月十一日	島津義久書狀案	一〇二二	九月 七日	勢田宗句書狀
一〇〇〇	三月廿三日	島津義久書狀	一〇二三	六月十九日	石田正澄書狀
一〇〇一	十月 廿日	島津義久書狀	一〇二四	五月 三日	近衛前久書狀
一〇〇二	十二月十六日	島津義久書狀	一〇二五	正月 三日	前田玄以等連署書狀
一〇〇三	八月 四日	島津義久書狀案	一〇二六	七月廿五日	島津勝久書狀
一〇〇四	五月十五日	島津義久書狀案	一〇二七	三月 廿日	龍造寺家門書狀
一〇〇五	十月十五日	島津義久書狀案	一〇二八	十月十九日	近衛尚通書狀
一〇〇六	十二月十三日	島津義久書狀案	一〇二九	八月十四日	近衛尚通書狀
一〇〇七	九月 三日	新納忠元・肝付兼盛連署書狀	一〇三〇	三月十三日	某書狀
一〇〇八	四月 三日	川上忠克外二名連署書狀	一〇三一	十二月廿四日	有馬義純書狀
一〇〇九	八月廿五日	佐伯惟教外三名連署書狀	一〇三二	十一月廿八日	志岐麟泉 <small>隆經</small> 書狀
一〇一〇	四月廿一日	鍋島信昌 <small>直</small> 書狀	一〇三三	十二月 六日	土持親成書狀
一〇一一		某寬書	一〇三四	十一月 六日	天草鎮尚書狀
一〇一二	十一月十二日	喜入季久書狀	一〇三五	十二月廿六日	土持親成書狀
一〇一三	七月十二日	本田親貞書狀案	一〇三六	六月十八日	飛鳥井雅繼書狀案
一〇一四	三月廿八日	宗固・道正連署書狀	一〇三七	八月 二日	龍造寺隆信書狀
一〇一五		某寬書	一〇三八	十一月廿六日	近衛尚通書狀
一〇一六	正月廿三日	臨江齋書狀	一〇三九		

一〇四〇 六月十六日 足利義昭御内書  
 一〇四一 八月廿四日 島津義久書狀  
 一〇四二 九月十三日 伊集院忠棟書狀  
 一〇四三 正月廿五日 毛利輝元書狀  
 一〇四四 三月 二日 秋月種実書狀  
 一〇四五 四月十二日 松浦鎮信書狀  
 一〇四六 五月十一日 小早川隆景書狀  
 一〇四七 某書狀  
 一〇四八 九月十五日 尊朝法親王書狀  
 一〇四九 三月 五日 近衛前久書狀  
 一〇五〇 島津義久老臣某書狀案  
 一〇五一 某書狀  
 一〇五二 五月 五日 近衛前久書狀  
 一〇五三 正月十三日 島津義久書狀案  
 一〇五四 二月十三日 島津義久書狀  
 一〇五五 正月十三日 島津義久書狀案  
 一〇五六 三月 九日 島津義久書狀案  
 一〇五七 四月十二日 島津義久書狀案  
 一〇五八 五月十八日 島津義久老臣某書狀案  
 一〇五九 五月廿四日 島津義久書狀案  
 一〇六〇 六月廿八日 島津義久書狀案  
 一〇六一 七月 島津義久書狀案  
 一〇六二 八月 島津義久書狀案

一〇六三 九月 二日 島津義久書狀案  
 一〇六四 九月十二日 島津義久書狀案  
 一〇六五 島津義久老臣某書狀案  
 一〇六六 島津氏告諭并唐船着津之時所  
 一〇六七 定法度  
 一〇六八 島津義久書狀案  
 一〇六九 島津義久書狀  
 桜井紹白書狀

花  
押  
一  
覽

## 例 言

- 一 花押一覽は「附録一」に収載された花押写を集めたものである。
- 一 写が不鮮明な場合は、島津家重書中の花押を転載した。
- 一 花押に附した数字は本文（附録一）の花押写の番号を示す。

愛阿 (大寺彈正忠)

1



赤松政則

2



朝倉義景

3



足利尊氏

4

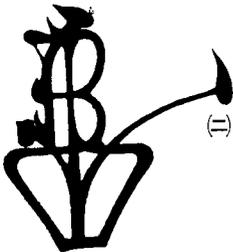


足利義昭 (一)

5



6



足利義種

7



足利義輝

8



足利義教

9



12



11



足利義滿 (一)

10



足利義政

15



荒武宗道

14



飛鳥井雅教

13



足利義持

18



安楽兼惟

17



有馬義純

16



有川貞政

21

石田三成



20

石田正澄



19

安楽某



24

伊地知重房



23

伊地知重時



22

伊地知重起



27

伊集院忠棟 (-)



26

伊集院是心



25

伊地知重行



30

伊集院久治 (一)



29

伊集院忠朗



28

(二)



33

伊勢貞成 (一)



32

伊勢貞知



31

(二)



36

伊勢貞昌 (二)



35

伊勢貞昌 (一)



34

(二)



39



(五)

38



(四)

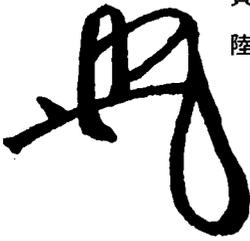
37



(三)

42

伊勢貞陸



41

伊勢貞真



40

伊勢貞豊



45

(二)



44

市来家親

(一)



43

爲成



48

今川貞臣



47

伊東祐商



46

一色藤長



51

入来院重門



50

今川三雄  
宮内大輔



49

今川貞世  
了俊



54

入来院重次



53

入来院重高



52

入来院重豊



57

入来院重頼



56

入来院重朝



55

入来院重時



60

上床国寄



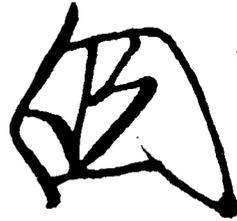
59

上井秀秋



58

梅北国兼



63

海老原爲信



62

荣寂



61

頼娃久政



66



65



大内義興 (一)

64



応胤親王

69



大友義鎮 (宗麟) (一)

68



大友親世

67



大寺政安

72



甲斐重政

71



落合兼仲

70



75

樺山久高



74

桂忠詮



73

可水



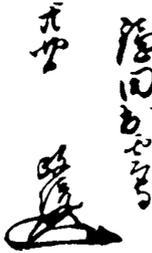
78

川上忠位



77

鎌田政統



76

樺山満久



81

川上忠智(脇枕)



80

川上忠智(脇枕)



79

川上忠克



84



83



川上久国 (一)

82



川上忠豊

87



川上某

86



川上某

85



川上久隅

90



喜入忠統 (初忠政)

89



鑑法

88



川口重昌

93

肝  
付  
兼  
統



92

喜  
入  
久  
政



91

喜  
入  
忠  
誉



96

(二)



95

行  
惠  
(一)



94

肝  
付  
久  
兼  
演  
兼



99

五  
代  
友  
泰



98

江  
鯢



97

隈  
江  
匡  
久



102

近衛前久 (一)



101

児玉利昌



100

五代友喜



105

近衛植家 (一)



104

(三)



103

(二)



108

(二)



107

近衛信尹 (一)



106

(二)



111

近衛尚通



110

近衛信尋



109



(三)

114

酒匂伊景 (一)



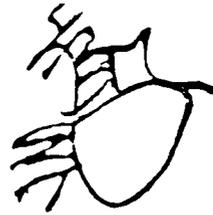
113

相良爲統



112

相良長唯



117

志岐諸經 (麟泉)



116

佐土原祐重



115



(二)

120

島津氏久



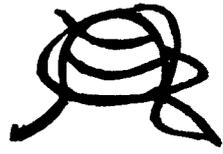
119

島津家久



118

慈冬



123

島津伊久



122

島津忠朝



121

島津勝久 (初忠兼)



126

島津実久



125

島津貞久 (二)



124

島津貞久 (道鑑) (一)



129

島津忠廉



128

島津忠興



127

島津貴久



132

島津忠繼



131

島津忠國 (二)



130

島津忠國 (一)



135

島津忠治 (二)



134

島津忠廣 (一)



133

島津忠治



138

島津忠良(日新)



137

島津忠嘉



136

島津忠昌



141

島津久逸



140

島津常久



139

島津立久



144

島津久馮



143

島津久通



142

島津久薫

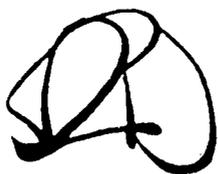


147



(三)

146



(二)

145



島津久豊 (一)

150



(二)

149



島津久元 (一)

148



島津久茂

153



(二)

152



島津久慶 (一)

151



島津久保

156



島津元久

155



(二)

154



島津宗久 (一)

159



(二)

158



島津守久 (一)

157



島津師久

162



島津義久 (一)

161



島津義虎

160



島津運久

165

守政



164

沙弥某



163

(二)



168

重令



167

取竜



166

守邦



171

昌和



170

少式冬資



169

少式貞頼



174



(二)

173



進藤長治 (一)

172



津興

177



(五)

176



(四)

175



(三)

180



信梁

179



進藤長盛

178



進藤長英

183

宗  
安



182

盛  
朗



181

(青巖寺) 政  
遍



186

尊  
朝  
法  
親  
王  
(一)



185

宗  
養



184

宗  
祇



189

尊  
朝  
力  
最  
胤  
力



188

(三)



187

(二)



泰朝

190



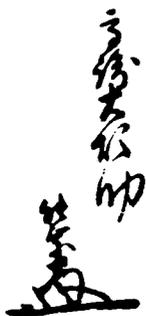
高崎能乘 (一)

191



(二)

192



193



瀧間宗運

194



長壽

195



(三)

196



東郷重盛

197



道澄

198



201

中野 歳信



200

長倉 祐省



199

徳川 家康



204



(三)

203



(二)

202

新納 忠元 (一)



207

新納 久元



206

新納 長住



205

新納 忠清



210

八重尾久重



209

仁礼頼景



208

新納弥七郎



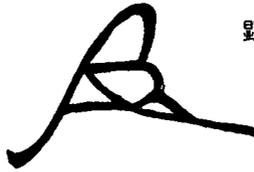
213

畠山政長



212

畠山直顕



211

八重尾某



216

比志島国幸



215

比志島国隆



214

肥後盛行



219

平田兼宗

期

218

日野町資将

爲

217

(筑前守) 秀秋

物

222

(不断光院) 清誉

法  
世

221

平田宗親

義  
勲

220

平田光宗

光  
宗  
勲

225

星野鎮胤

鎮  
胤

224

別府某

京  
五

223

布施英基

英  
基

228

北  
郷  
知  
久



227

北  
郷  
時  
久



226

北  
条  
義  
時



231

本  
多  
正  
純



230

本  
田  
親  
歳



229

北  
郷  
久  
加



234

本  
田  
宗  
親



233

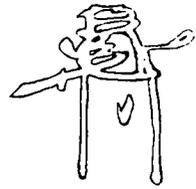
(二)



232

本  
田  
正  
親

(一)



237

三原重庸



236

松尾頼元



235

町田久倍



240

村田経定



239

明真



238

明見



243

森澄秀



242

村田経安



241

村田経平



246

山田有榮(昌巖)



245

盛房



244

毛利輝元



249

四辻季遠



248

祐身



247

山田有信(理安)



252

龍造寺家門



251

賴忠



250

賴金



255 某



254 某



253 某



258 某



257 某



256 某



